

言の葉俱樂部

ことのはくらぶ



kotonoha club-II Vol. 10 2013.3.30

言の葉倶楽部・ii 第十号 目次

- エッセイ◎ 鉄路の完全復旧を願って 福岡俊一 2
- エッセイ◎ 高村光太郎への手紙 高橋英司 10
- 随想◎ ぐうたら草 第四百四十四段〜第五百九十九段 菊地隆三 15
- 研究◎ 象徴（シンボル）への航海 第三章 鎌上宏 21
- 詩◎ 八編 大江利知 32
- 詩◎ 二編 尾崎まりえ 38
- 感想◎ ぐご一新 再考 岩井哲 43
- 自分史◎ 要領の悪い歩行について（部分草稿） 高橋K2 48
- ノンフィクション◎ 「いろどり」の人たち 佐藤藤三郎 61

鉄路の完全復旧を願って

◎福岡 俊一

1

東日本大震災により、東北の太平洋側の鉄道が多くが甚大な被害を受けた。今なお鉄路が寸断されたままの路線は数多い。四年前の三月、私はJ R大船渡線と気仙沼線、三陸鉄道南リアス線完乗の旅をした。これらの路線も、未だ完全復旧には程遠いが、何としてもその復旧を強く望むものである。そこで、この三路線の完乗報告記を掲げ、その思いを伝えたい。復旧ままならない現時点で、三路線健在の往時のことをそのまま記すことには全くの躊躇がないわけではないが、敢

えてそうすることで、いずれの日にか再びこのときと同じ鉄路の旅ができることを信じ、さらに他のすべての不通路線も含めた復旧を念じたい。

なお、この三路線の現在の復旧状況を付記しておく。

大船渡線は一ノ関―気仙沼間は復旧し、気仙沼―盛間についてはBRT（バス高速輸送システム）運行開始の目途が立っている。しかし、BRT区間の鉄路による本復旧については、議論を続けるとの見解にとどまっている。気仙沼線は前谷地―柳津間は復旧し、柳津―気仙沼間についてはBRTが本格運行を始めた。しかし、BRT区間の鉄路による本復旧については、大船渡線同様議論を続けるとの見解にとどまっている。一方、三陸鉄道南リアス線は完全復旧に向けて懸命の努力が続けられており、とりあえず本年四月より吉浜―盛間が開通する予定である。

それでは、以下に三路線完乗報告記を綴る。

2

平成二十一年三月十四日。六時二十八分、山形駅発仙台行の仙山線に乗車。全国的に荒模様の天候との予報がなされている中、定刻発車。順調に仙台に向かう。一泊二日の旅行。行先は大船渡。他の仲間のみな車で目的地に向かう。同行してくれるのを密かに期待して

いたS氏は、下戸であるという理由からか車の運転手に抜擢されてしまい、私は一人淋しく、は全然ないが、ともかくも一人旅である。

定刻七時五十三分に仙台駅五番線ホームに到着。二番線ホームから出る八時一分発の一ノ関行に乗り換える。この二番線には、実は二つの列車が同時に、ほんのちよつとだけ離れて待っている。一つは下り一ノ関行だが、もう一つは上り岩沼行。ふだん利用しなれている人と鉄道マニアはまちがわれないものの、そうでない人は必ずどちらに乗ったらよいのかとまどろ。「上り側が岩沼行で、下り側が一ノ関行」と駅員が指示してくれるも、どちらが上りか下りかもあまりよくわからない一般人にとっては、結局ややこしいばかり。しかも、発車時間までが際どく近い。空いている番線が他にいくらかもあるのに、どうして同じ番線から、ほぼ同じ時刻に「よいい、ドン！」と反対向きに発車させるようなことをしているのか？今日から、ダイヤ改正により、かねてからのこの紛らわしい方式が解消されるものと思いきや、全く変更されていなかった。

さて、二両編成の東北本線一ノ関行も順調に走り、定刻九時三十四分に一ノ関到着。「いちのせき」は、地名や市名としては一関であるのに、何故か駅名は一ノ関となっていて、これまたたいへん紛らわしい。鉄道のことをいろいろ調べていると、こういう紛らわしい

ことが数限りなく出てきて、いくら紙面があっても足りないくらいであるが、それはそれとして、肝腎の大船渡線に乗り継ぐ。

九時五十三分定刻発車。乗客はまばらであるが、これでもまずまず乗っている方であろうか。大船渡線は「なべづる線」として、昔から夙に知られている。一ノ関から東進して陸中門崎に至るまでは問題ないのだが、そこからそのまま素直に東進して千厩に至ればよいものを、線形はそうはなっていない。何故か大きく北に方向を変え、梟鼻溪を通り、また東に向いて柴宿、摺沢を通り、またまた南下してようやく千厩に至るといふ、コの字型を左九十度回転させたような路線図を描くので、先のように命名されたのであろう。最近はこの線形を龍の姿に見立ててか、「ドラゴンレール」なる愛称が付けられており、ここを走る快速の名称も「スパーードラゴン」と勇ましい。名前は勇ましいけれど、路線が迂回している結果、ちつとも早くは着かない。だから、鈍行でゆつくり行ってもそんなに変わらない。どうしてこういう線形になったかは、これまでにもいろいろな取り沙汰がされており、敷設当時に権力を有していた政治家の誰それが無理やりどこそこを通したかったとか何とか、その方面の書籍には詳しいのだが、私はあまりそういう腥い話は好かないので、ここに詳細は述べない。

一ノ関を出て数分で真滝の駅に着く。ここで、上り列車と交換する。通常、大船渡線のような本数の少ない路線は、列車が終点でそのまま折り返すことが多いので、このように一つ手前の駅で二つの列車が行き違うことはけっこう珍しいダイヤの組み方だと言える。真滝を出てすぐ、並行する道路の行先掲示板に「気仙沼 45km」とある。道路はほぼ真つ直ぐに走っているのでそうなのだけれども、線路の方は先ほどのような実態でくねりにくねっている。気仙沼まで六十km近くもある。まあ、私から言わせれば、その分長く鉄道の旅が楽しめるのだから、誠に嬉しい限りである。

車窓を眺めると、線路に沿って奔る道路はかなり狭い。鉄道もあまりパツとしないが、道路の方も未整備を感じさせる。やがて、大きな川を渡り、長いトンネルを抜けると、陸中門崎である。「もんざき」でも「かどざき」でもなく、「かんざき」と読む。本当に駅名の読み方は難しい。このあたり、造りの立派な旧家が多くなっている。

次は岩ノ下。まさに岩山の下に集落があり、駅がある。続く陸中松川もそれなりの集落である。そして、狛鼻溪駅に辿り着く。観光地なるも、乗降客はなし。今は、ほとんどの観光客は車を使うのだから仕方ない。柴宿、摺沢、千厩と比較的大きな町並みが続く。特

に、摺沢駅はローカル線にしてはずいぶんけっこうな駅舎である。摺沢・千厩間は長い。ついうとうととしてしまった。小梨、矢越と停まって、折壁に着く。そう言えば、東北本線一ノ関の仙台寄り一つ手前にも有壁という駅があつて、岩手県内の駅が続く中にポツンとこの駅のみが宮城県領であるため、鉄道マニアにはよく知られている駅だ。鉄道地図を毎日のように見ている私だが、駅名というのは本当に不思議なもので、ある地方にある種の似た地名が固まっていることがけっこうある。今日は大船渡を通り越して、一旦釜石まで向かうのだが、この釜石付近には「○石」という駅名がたいへん多い。両石、津軽石、箱石、二升石というふうにある。

そんな余計なことを考えているうちに、次の新月に着いた。「しんげつ」ではなく「にいつき」である。この駅、もとはホームが2面あつたはずなのだが、上り側のホームは現在廃墟と化し、草が生い茂っている。ここから列車は、長々と山あいを抜けて進んでいく。すると、突然のように気仙沼の駅に到着する。

3

気仙沼と言えば漁港というイメージであるが、この気仙沼の駅を眺める限り、そんなことは想像だにも及

ばない。実は、気仙沼線の南気仙沼駅こそ港に近いが、気仙沼線との分岐駅ともなっているこちらの気仙沼駅は、まったく山の中と言っているところ立地している。海も見えなければ、街並みも見えない。

風の強くなってきた気仙沼駅を出て、またすぐトンネルに入り、そこを抜けるとようやく市街の一部が展望できる。そして、鹿折唐桑に着く。読みは「ししおりからくわ」である。それでも、海は見えず。次の上鹿折はまたまた山あいの小駅である。しかも、ここからはひどい山峡である。やっと山里が見えてきて、陸前矢作に着く。この先はだんだん平地となってきた、竹駒という駅に停まる。と、気仙沼から乗った二人の女性客が、どうやら気仙沼線に乗ったつもりが誤って大船渡線に乗りしてしまったものと見え、運転手にどうしたらよいか、と相談している。こんな本数の少ない路線で乗り間違えたら最後、どうにもならない。いくら竹駒というイメージの良い名前の駅で降りたとして、どうにもならない。どうせ逆方向の列車に乗って気仙沼に戻るにしても、次の陸前高田駅が大きいから、そこで待ち合わせた方が良いとのアドバイスを受けて、仕方なく乗り続ける二人であった。

その陸前高田駅に入線するちよつと手前、右手に小さな鳥居だけがすぐ線路脇に見えたが、社殿らしきものは見えず、アレッと思う。車窓を丹念に眺めている

と、そんな些細なことも気になってしまったりする。きつと、しっかり記録にとどめさえすれば、珍百景などわけなく蒐集できるだろう。ところで、陸前高田は「りくぜんたかた」で「りくぜんたかた」ではない。高田という駅は全国にいくらかでもあつて、信越本線、和歌山線、桜井線の高田、只見線の会津高田、越美北線の越前高田、養老鉄道的美濃高田、近畿鉄道の大和高田と高田市は「たかた」と濁って読む。それに対して、横浜市営地下鉄、高松琴平電気鉄道、甘木鉄道の高田、ここ大船渡線の陸前高田は「たかた」と澄んで読む。さらに、長崎本線の高田と肥薩おれんじ鉄道の肥後高田は「こうた」なので、本当に迷ってしまう。

陸前高田を過ぎて、やつとこのことで海が見えて、脇ノ沢到着。ここからは、いよいよ海際を走っていく。ふと向こう隣の席を見ると、男子高校生が大きなバッグを持って乗っている。そのバッグに大きく名前が書かれていて、名字が砂金とある。「いさご」君というのか、そう言えばこのあたりは金の産出で有名な気仙地方であったなあ、と思ひ当たる。因みに、気仙地方というのは、現在の大船渡、陸前高田、住田を合わせたあたりである。気仙沼は入らないので、これまた紛らわしい。だから、地元の人にとって、気仙中学校が陸前高田市立で、気仙沼中学校が気仙沼市立であるのは当たり前なのだろうが、よそ者にとっては頭がこんぐ

らかつてしまう。なお、金は金鉱でも取れたが、砂金の形でも取れた。だから、砂金という名字は、まさに気仙の歴史を物語っていると言つてよいだろう。

小友から細浦にかけては、風光よし。細浦は、その名の通り、細く行き詰まった天然の良港である。次の下船渡に行く間に、線路に沿った道に小梨商店と看板があった。そう言えば、千厩の次に小梨という駅があったなあ、などと回想しているうちに、大船渡の市街と港が近づいてくる。下船渡、大船渡と停まって、終点の盛に定刻十二時二十分に到着した。盛は「さかり」と読む。読みにくいからか、列車の行先表示板や駅の列車案内板はことごとくひらがな書きで「さかり」となっている。この地名は、もともとの意味は「下がり」であり、傾斜地を表したものである。後に縁起のよい盛の字を充てたものであろう。

4

ここからは、三陸鉄道南リアス線に乗って釜石まで行く。釜石まで何をしに行くわけでもない。ただ三陸鉄道に乗りただけである。三陸鉄道に乗ると、釜石まで連れていってくれる、というだけの話である。十二時三十五分の列車は二両編成のレトロ仕様である。昔の一等列車みたいなのに、部活帰りの高校生が乗っ

ているのは何とも不思議な光景である。乗客は、高校生と観光客が半々。そこに、数人の鉄道マニア。けっこう混んでいる。鉄道マニア客というのは、一目見るとすぐわかる。まず、圧倒的に男性の一人旅。そして、大きな分厚い時刻表を携帯。列車が入線してくると、忙しく写真を撮りまくる。極めつけは、寝ないこと。いついかなるときでも、車内を眺め回し、車窓を食い入るように見詰め、そしてニタツとする。気持ち悪い。自分だけは、鉄道マニアなどと思われてなるものか、と思いつつ、お互い一目見た瞬間に、自ずからわかっ

てしまう。なお、三陸鉄道はスイッチバックのように、もと来た方向に出発した後、左に大きく旋回してから方向を変えて釜石に向かう。そのため、出発時に海側の方に座っていると、肝腎のときには山側が変わってしまう。車内を見渡すと、鉄道マニアとおぼしき方々はみな揃いも揃って、現時点では山側にあたる方に席を占めている。私一人が海側。鉄道マニアと見破られない作戦である。どうせ釜石で折り返して来るので、帰路で海側に座れば何の問題もないのである。というよりも、私は、左手の岩手開発鉄道の車両などをよく見たかったために、敢えて海側に座ったのであった。岩手開発鉄道は、わずか十一・五kmの貨物鉄道であり、平成四年までは旅客輸送も行っていたが、現在は北上山地

の山裾を縫って、石灰石だけを黙々と運び続けている。盛から山の手に向かっては岩手石橋まで、途中に長安寺、日頃市の二つの駅がある。盛から海の方に向かっては赤崎の駅へと延びている。

三陸鉄道のレトロ列車は定刻十二時三十五分発。先ほど述べたように、出発直後に左に大きく旋回し、例の岩手開発鉄道のリールを跨ぐと、次の陸前赤崎に着く。そこからは長いトンネルとなる。ようやく抜けると綾里。読みは「りょうり」。本来は稜線の稜の字で「稜里」だったとか。しかし、地元には綾姫の伝説なるものも残っているらしい。そう言えば、近くの山田線には吉里吉里なる珍駅名がある。また、トンネルをくぐって、抜けると、次は小石浜。リールの曲がったところに駅があるため、列車はかなり傾いて停まる。海がほんのちよつと見える。また、トンネルをくぐって、抜けると、甫嶺。甫は浦に通じる。本来は単純に「浦山」だったらしい。綾里といい、甫嶺といい、中国風の地名が続く。

次の三陸駅で、さらに観光客がドバツと乗り込み、山手線のような混雑になってしまった。吉浜駅と唐丹駅の間に写真撮影のスポットがあり、数分間停車のサービスがある。このあたりは、駅を出るとトンネルの連続、そのトンネルを抜けるとまた駅、という具合で、トンネルとトンネルの間に、わずかながら海の垣間見

える一瞬がある。ところで、唐丹は「とうたん」でも「からに」でもなく「とうに」。続く平田も「へいでん」でも「ひらた」でもなく「へいた」。妙な重箱読みの地名である。ものの本によると、「トウニ」はアイヌ語で「檜の木の生えるところ」、「ヘイタ」はアイヌ語で「約束した場所」という意味だとある。

平田を出て、大きく左に曲がって行くと、釜石の街が見えてくる。釜石の地名の由来は、大きなお釜の形をした石のある、釜淵から来たという説の他に、アイヌ語説もあるらしい。どちらにしても、地名も市名も駅名も釜石なので問題はない。ところが、宮城県に塩釜という駅があるが、こちらは地名、市名としては塩竈が正しい。さらに、神社は鹽竈神社が正式であるというから、本当にややこしいことこのうえない。

話が脱線してしまったが、釜石に十三時二十八分に到着するや、すぐ折り返し、さつき乗ってきたばかりのレトロ仕様列車で、また盛に戻る。十三時四十五分発。

盛に定刻十四時三十五分に着き、急いで切符売り場ですで「三鉄赤字せんべい」を購入。赤字せんべいとはずいぶんそのまんまの単刀直入なネーミングである。しかし、ぬれ煎餅で有名な銚子電鉄のように必死で売ろうとしている風情ではない。因みに、銚子電鉄は最近ぬれカステラなる新商品も開発した由。

さて、十分の乗り換えで、再び大船渡線に乗り、細浦まで戻る。車内は、ほぼ地元の高校生のみの状態。〇東高校のかなりイケメンの男子生徒が、隣の女子生徒とイチチャツイしているのが、目についた。どこのローカル線にもありがちな風景である。

細浦駅に降りたつや、S氏の運転する車に迎えに来てもらい、宿泊所に向かう。一日目の報告は以上である。

5

翌十五日は、気仙沼線完乗を目指す。S氏の車で気仙沼駅まで送ってもらい、十一時二十七分発車の小牛田行に乗る。乗客はほんの数名。昨日とはうって変わって明るい日差しである。気仙沼駅を出るや、大きく弧を描くように左に旋回して走行方向を変え、新興住宅地を抜けて不動の沢駅到着。次の南気仙沼駅がもつとも中心街に近い駅である。乗客が多少は増える。松岩駅は、〈松岩と言へども松はなかりけり〉で、松の代わりに杉があるのか花粉症の私は鼻がむずむずするばかり。海が見えて、次の最知。そして、陸前階上。読みは「りくぜんはしかみ」。八戸線にも階上駅があるの思い出す。大谷海岸は海沿いの駅。ここには、立派な松林がある。眩しいくらいの青空となる。続く小金沢も海際の駅。かなりの高みから海を見下ろすような

位置に駅がある。トンネルを抜けて、本吉、陸前小泉。昨日の三陸鉄道と同様に、気仙沼線もトンネルとトンネルの間にふつと海の見える景色が覗き、そこに駅がある。その連続である。蔵内はまさに、そういったトンネルとトンネルのはざまの閑散駅。

陸前港駅は、〈港とは言へど海など見えざりき〉で、またまたトンネルに突入。歌津は、文字通り入り江が向こうに望める駅である。トンネルの中で、次の駅を案内するアナウンスを聞き、トンネルを抜けると、すぐに駅がある。まさに、その繰り返しである。清水浜は「しずはま」と読むが、かろうじて遠くに海が望める山際の小駅。志津川は、南三陸町の中心駅である。ここで、何故だか多くの女子生徒ばかりが降り、多くの男子生徒ばかりが乗り込んだ。またトンネルに入る。久々に海沿いを走ると思えば、また山。陸前戸倉の次の陸前横山は、山あいの地に横に長く開けた集落。柳津は、北上川岸にあるそれなりに大きな町。大河を渡り、御岳堂。このあたりから平地となつて、陸前豊里。そう言えば、奥羽線にも羽前豊里駅がある。

次の、のの岳は珍しくひらがなの入った駅。幼いころからずっと気にかかっていた駅名の一つ。正しくは篋岳と書くらしい。あまりにも難字難読のため野々岳と書いたり、駅名のようにひらがなで書いたりしてきたらしい。「ノノ」はもともととは巫女を意味したと伝え

られる。そう言えば、関西でノノ様と言えば仏様のことである。何らかの関連性はあるのだろう。和溷、そして前谷地。正確には、ここが気仙沼線の終点である。しかし、列車はここからさらに石巻線に乗り入れて小牛田に向かう。

6

かくして、大船渡線と気仙沼線の初完乗は、順調に成し遂げることができた。

ここからは報告記としては余談になる。小牛田から陸羽東線で新庄へ、そして新庄から山形へ戻る途上で、一波乱が起きてしまった。陸羽東線の鳴子温泉行には支障なく乗ったものの、鳴子温泉駅に降り立つと、すぐ接続するはずの鳴子温泉発の新庄行がまだ入線していない。強風のために到着が遅れており、折り返し運転のため、三十分遅れて発車の見込みだと言う。とんだハプニングだ。途中少しは遅れを取り戻したものの、新庄駅には約二十分遅れの十六時二十分到着だった。ところが、十六時十七分発の山形行は、ほんの数分前に出てしまったと言う。残念無念である。

駅員は、次の「つばさ」に乗れと簡単に言うが、そんなことをしたら、せつかくの鈍行列車の旅が水泡に帰すというか、画竜点睛を欠くというか。まったくもつ

て話にならない。

結局、新庄駅の待合室で次の普通列車を待つて、山形に帰る私であった。
(終)

高村光太郎への手紙

◎ 高橋英司

あなたの詩というと、人口に膾炙した「道程」や、『智恵子抄』所収の「あどけない話」や、臨終をうたった「レモン哀歌」を思い浮かべます。詩人は詩によって生きるのですから、あなたのイメージが、それらの代表的な作品から導かれるのは自然な成り行きだと思います。前向きで真っ直ぐな生き方、一途に妻・智恵子を愛し続けたこと。江戸っ子らしい清廉で愚直な人物像です。私の好きな「あどけない話」を声に出して読んでみたいと思います。

智恵子は東京に空が無いといふ、

ほんとの空がみたいといふ。

私は驚いて空を見る。

桜若葉の間に在るのは、

切つても切れない

むかしなじみのきれいな空だ。

どんよりけむる地平のぼかしは

うすもも色の朝のしめりだ。

智恵子は遠くを見ながら言ふ。

阿多多羅山の山の上に

毎日出てゐる青い空が

智恵子のほんとの空だといふ。

あどけない空の話である。

前略。高村光太郎様。年末に机上に積み重なった文庫本を片付けながら、一番下になっていた『高村光太郎詩集』を手に取りました。平成四年高村記念会刊（北川太一編）の文庫詩集です。紙質が悪いのか、年月のせいなのか、縁の部分は一センチほど茶色に変わっていました。平成十四年に盛岡へ出向いた折、途中、花巻で高速を降り、高村山荘に立ち寄った時に求めたものです。

表紙カバーの絵は、あなたの素描「手と星空」、扉の写真は、トマト畑の手入れをする昭和二十四年夏のもです。まん丸メガネに麦わら帽子、顎、口回りの髭は白くなっています。当時あなたは六十七歳。花巻に疎開して四年目でした。

初めてこの詩を読んだのは、現代詩などには全く無関心な十代の頃でしたが、啄木の「不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」などの歌と同じように、脳裡に沁みるように記憶に残ったのでした。智恵子って誰？ と疑問に思うほど、何の予備知識もなく、ただ作品に向かっただけで、純なイメージが心の中に流れ込んでくるのでした。背景を知らなければ、恋愛詩としては読めません。思想詩ではありませんし、故郷の自然をうたっただけで、唱歌の「ふるさと」と何ら変わりがありません。それでも、いいなあ、と感じさせるものがあります。それが何なのか。それが詩だとしか言いようがありません。

高村光太郎様。あなたは、明治十六年、仏師・木彫家の父・光雲の長男として生まれました。明治維新以後、廃仏毀釈運動の影響で仏師の仕事は少なく、生活は苦しかったと伝えられています。しかし、職人氣質の父・光雲の腕は確かで、やがて岡倉天心に見出されて、東京美術学校（現・東京芸大）に奉職、帝室技芸員にも任じられます。高村光雲と言えば、シカゴ万博出品作「老猿」（重要文化財）が、美術や歴史の教科書に写真が出てきますので、よく知られていますし、上野恩賜公園の「西郷隆盛像」や皇居前広場の「楠公像」の製作に携わった存在です。後に、父・光雲は、明治大正期における彫刻界の重鎮になりました。出自で人

間を判じることに私は反対ですが、どのような精神風土に育ったか、という意味において、大事なことだと思えます。政治や芸術の世界に限らず、二世、三世の活躍が目立ち、その弊害も論じられる昨今ですが、世襲の持つ長所を認めないわけにはいきません。

あなたの感性は文学によって磨かれました。十七歳ごろから文学に目覚め、さかんに俳句や短歌を作り、明治三十三年、十八歳の時に、与謝野鉄幹の歌に惹かれて新詩社に入り、短歌のみならず、様々な作品を『明星』に発表しました。人間らしい生き方を追求するロマン主義の新詩社は、与謝野晶子はもとより石川啄木、北原白秋らがメンバーだったはずですが、あなたの人道主義的な感性は、その時期に形成されたと思われるます。

また、あなたの彫刻への開眼は、ロダンとの出会いでした。雑誌でロダンの彫刻写真を見て衝撃を受けました。生命感あふれる彫刻に真を感じました。その後、二十四歳から二十七歳まで、ニューヨーク、ロンドン、パリへと渡り、真の人間の生に開眼し、彫刻の何たるかを掴みました。あなたは洋行して、何を見て来たのか。何を感じて来たのか。あなたの芸術を理解するのに最も重要な体験だったのだと思います。あなたが最も強く感じたのは、西洋とわが国との間の落差でした。パリで、あなたはボードレールやヴェルレーヌの詩を

読み、全存在を投げ打って生き、詩を書く詩人の姿に衝撃を受けました。日本の詩は作りものでしかないと感じていたあなたは、ロダンと同じ人間精神を詩の世界にも見たのでした。

ですから、帰国すると、あなたは旧体制の権化のような父・光雲に反発しました。派閥主義、義理人情が支配する旧弊な美術界を改革したいと考えました。文展へは出品せず、美校教授は引き受けず、父の意に反する行動を取り、苦悩と模索の辛い日々を送りました。そのような時、奇跡のように現われたのが長沼智恵子でした。

芸術の悩みを知り、芸術の価値を知り、芸術を理解してくれる存在。智恵子は、日本女子大学家政学科卒業後も東京に残って絵の勉強をし、平塚らいてうらの雑誌『青鞥』の表紙絵を描いている女性でした。彼女とは、愛と信頼と互敬によって結ばれた理想的な関係でした。あなたは、後年、智恵子について「私への愛と信頼の深さは殆ど嬰兒のそのやうであつたといつていい。私が彼女に初めて打たれたのも此の異常な性格の美しさであつた」と書いています。あなたは、二十九歳の時に知り合い、大正三年、最初の詩集『道程』を自費出版した三十二歳の時に、三歳年下の智恵子と結婚しました。

長く読み継がれている『智恵子抄』に、恋愛、結婚、

発狂、死に至るまで、書き続けられた詩篇は、あなたにとつて、妻・智恵子がいかなる存在であつたかを物語っています。愛妻物語、相聞の歌として私たちの心を打ちます。

さて、高村光太郎様。私は、花巻の山中で書かれたあなたの『暗愚小伝』を読みながら、あなたが、なぜ戦争賛美詩を書いたのかを考えました。そして、妻・智恵子が病没しなければ、あなたは戦争賛美の詩などは書かずに済んだのではないか、とも思いました。あなたの生は、半身とも言うべき智恵子によって支えられていたからです。没後の喪失感、空虚感が、あなたの生の回復として、戦争協力へと向かわせたように思われるのです。大政翼賛会から要請を受けた時、妻・智恵子なら、そんなことは止した方がいいよ、とストップをかけたかもしれません。

まず、あなたの戦争賛美詩を読んでみなければならぬと思います。日本ペンクラブの電子文藝館なるサイトから引用します。「真珠湾の日」を読んでみたいと思います。

宣戦布告よりもさきに聞いたのは

ハワイ辺で戦があつたといふことだ。
つひに太平洋で戦ふのだ。

詔勅をきいて身ぶるひした。

この容易ならぬ瞬間に

私の頭脳はランビキにかけられ、

昨日は遠い昔となり、

遠い昔が今となつた。

天皇あやふし。

ただこの一語が

私の一切を決定した。

子供の時のおぢいさんが、

父が母がそこに居た。

少年の日の家の雲霧が

部屋一ぱいに立ちこめた。

私の耳は祖先の声でみたされ、

陛下が、陛下がと

あへぐ意識に眩いた。

身をすてるほか今はない。

陛下をまもらう。

詩をすてて詩を書かう。

記録を書かう。

同胞の荒廃を出来れば防がう。

私はその夜木星の大きく光る駒込台で

ただしんげんにさう思ひつめた。

人間の尊厳、生を阻害するものは打たねばならぬという論理が、智恵子に代わり、天皇によって支えられ

*蘭引＝蒸留器

るようになったかのようです。大正から昭和にかけて、社会の矛盾が噴出し、昭和四年の世界恐慌という歴史の曲がり角に立って、戦争の予感があり、昭和六年に発症した智恵子の統合失調症。昭和十三年、智恵子亡き後、あなたは「恐ろしい空虚」に囚われ、矛盾を止揚すべく、為すべきことを為す以外にない、と侵略戦争を容認するようになったのだと思います。

一方で、あなたはロマン・ロランを熱く信奉し、戦争題材の芸術作品を批判してもおりました。いくつかの蟬の木彫を製作し、「蟬を彫る」という詩も書いています。しかし、あなたは昭和十六年十二月八日、反戦思想のロマン・ロランとは別の道を選びました。詮無いことですが、妻・智恵子が存命ならば、あなたはロマン・ロランの道を選んだのではないかと想像します。戦後、文学者の戦争責任が問われる状況下、あなたは詩的自伝『暗愚小伝』を書きました。

これは必ずしも戦争責任の書の体裁を持っていませんが、自らの生涯を冷静に点検、確認、内省を行った作品でした。

凡庸な人間は、過去に過ちを犯したとしても、冷静に自己を省察することができず、何とか正当化しようとする論理を考え出そうとします。自らの過去を全否定すれば、絶望し、虚無感に陥り、死を選ぶしか道はなくなります。それはそれで潔いとする見方もありま

すが、誰しもそのような勇氣を持つものでもありません。ちゃらんぽらんな生き方は、途方もない危険を冒すことがないかもしれませんが、それは決して美しい生き方ではありません。ぶれない中庸に位置し、曖昧に生きることは、価値の転倒に対して冷やかですが、創造的な芸術の忌み嫌うところだと思います。

高村光太郎様。あなたは、真面目で、真つ直ぐで、真摯な生き方をする人でした。あなたは「山林」という詩で、「おのれの暗愚をいやほど見たので、／自分の業績のどんな評価をも快く容れ、／自分に鞭する千の非難も素直にきく。／それが社会の約束ならば／よし極刑とても感受しよう。」と書いています。この点が並みの文学者と大きく違う点です。あの当時はやむを得なかったのだ、と言いつつ、口を閉ざす者が多い中で、あなたは自己の責任をきちんと表明しました。立派だと思います。

実は、昨年、劇団・東北幻野による『智恵子・千年の恋―光太郎のばか』(作・演出 大原螢)という演劇公演がありました。途中、うつらうつらしながら観劇し、青春の恋愛劇がクローズアップされるあなたのイメージに思いを馳せ、智恵子亡き後のあなたはどうかだったのだろうか、と私は考えました。そこで、『暗愚小伝』を読み返しながら、あなたに一筆啓上しようと思いついた次第でした。

昨今、何やらきな臭い風潮が社会に立ち込め始めました。あなたの悔悟と内省を、自己のものとして胆に銘じ、残りの人生を生きて行きたいと思えます。

ぐうたら草

ならないか、私は、はらはらして、浅草観音様の境内から見上げていただけである。

第四百十五段

◎ 菊地 隆三

危機管理に当る人は、「想定外」という言葉を使って、責任逃れは許されない。

この世が、この地球が、この宇宙が、総て想定通りに動いてくれるなら、何も苦勞はない。

次の言葉は、日本語を大事にするこの〈言の葉俱樂部〉には合わないかもしれないが、安全対策、危機管理の要諦について、英語ではあるが、非常に参考になる。

Think unthinkable.

(考えられないことを、考えよ)

Never say "Never."

(決して起こらないと、決して言うな)

第四百十六段

みっともないもの、三つ。

一、少しでも長生きしようとして、汗水たらして、はあはあジョギングしている老人。

「山羊と馬鹿は、高い所が、好き」

子供の頃、よくこんな俚言めいたことを聞かされた。

確かに、山羊は高い所を、平気で走り廻る。

この度、浅草の観音様の近くに、スカイ・ツリーとかいう世界一高いタワーが出来た。

これは、馬鹿には作れない。大変頭の良い人が考えたもので、凄い技術だと思う。

しかし高所恐怖症の私は登る気がしない。高さ、六三四メートルとの由。

六三四は（むさし・武蔵）から取ったと言われるが、六三四は（むみよ）（無明）にもつながる。

形あるものは必ず壊れるとか。想定外のこと起き、ばたりと倒れたりしないか、バベルの塔のように

一、演奏会最中に、大軒かいている肥つちよ。

一、人前で、部下をがみがみ怒る上司。

第四百四十七段

敬老の日、老健施設に、長い付き合いのあつた知人を見舞つた。手足はかなり不自由だが、頭はまだしっかりしている。

そこへ若い女の看護師（以前は、看護婦という便利で良い呼び方があつた）が来て、優しく甘い声で知人の老人に声を掛けた。

「おじいちゃん。さあ、おまんま、たべまちよ」

「おてて、きれいきれい、ちまちよ」

「まあ、おじいちゃん。おじようず、おじようず」

赤ん坊扱いされて、知人老人はふて腐れたような顔をしていた。老人は單に年を取つた赤ん坊ではない筈である。これでは、私だつて面白くないし、入所したくもない。

しかし機能衰えて手足不自由な老人では、どうしようもない。ああ、悔しいかな。

敬老とは、何ぞや。

某国のアソー大臣とかが言つたそうである。「そう

いう人は、さつさと、くたばれるように……」とか、云々。

第四百四十八段

「良薬は口に苦し」と言われる。

しかし、「苦い」ということは、「良」を損う一つの因子である。

口舌に甘く快い美酒は、その意味で、最高の良薬である。

「良薬は口に甘し」

今後、この種の良薬の多からんことを願うものである。

第四百四十九段

「男は、強くなかつたら、生きていられない。やさしくなかつたら、生きていく資格がない」

これは、米国のハード・ボイルドの作家、レイモンド・チャンドラーの作品の中に出て来る余りにも有名な台詞である。

しかし、この台詞の中の〈男〉を、〈女〉に書き変えても、この頃では少しも違和感がない。

すぐに切れて離婚をしたり、育児放棄したり、保険

をかけて男を殺したりのニュースが矢鱈に多い。

第五百十段

二〇一一年の東日本大震災による津波の陸地遡上高は合同調査結果によれば、岩手県宮古市で、史上最大級の四〇・五メートルであることが分った。

因みに、一八九六年の三陸津波では、同県大船渡市の三八・二メートルが最大であったという。

こういう記録は大変恐ろしいことなのに、十年もすれば殆どの人の頭から忘れられてしまうので、ここに記しておく。

第五百十一段

〈軍隊〉は〈運隊〉だと言われた。確かに弾に当たって戦死する兵もいるし、そのすぐ隣にいて、弾に当たらない人もいる。

〈人体〉も〈運体〉みたいなもので、運・不運がある。これだけは、どうしようもない。

この度の東日本大震災の被災者を、天罰が当たったと言った政治家がいたというが、酷な発言であろう。

善人だろうと悪人だろうと鑑別なしに、禍事は、そこに居合わせた人に襲いかかって来る。そして、これ

を防ぎようがない。

これを避けるには、そこに居合わせないことしかない。居合わせることは、生きていることである。これはまさに〈天運〉としか言いようがない。

広島で原爆に合い、たまたま長崎に行ったところ、そこでも再び原爆に会った人がいて、それを（世界で最も運の悪い男）としてイギリスのテレビがお笑い番組に取り上げたという。少しも笑いの対象にならないのに、他人の不運なら平気で見ておられる残酷さが人間にはある。悲しむべき性（さが）である。

居合はせし 居合はせざりし ことついに
天運にして 居合はせし人よ （竹山 広）

第五百十二段

「明日のことを思い煩ふな。明日は明日みづから思い煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり」

私はクリスチャンではないが、〈山上の垂訓〉のこの部分を読む度に、イエス様は真に生き方の達人だと思う。

総て天に任せ、心、長閑のどかに生き、明日のことは何も考えない。その日一日の中で巡り会えた総てのこと（人・物・食べ物・天候・その他諸々）に感謝し、決して文句は言わない。

これぞ「ぐうたら人生」の真髓と言える。

第百五十三段

百円ショップにしょっちゅう出入りすると、顔や態度や内面の心までも百円相当、または百円以下になってしまふような気分になるので、自分は絶対に出入りしないという詩人がいた。

「武士は食わねど高楊枝」の感じがしないでもないが、この詩人の品格がなんとなく高貴に見えるのは不思議である。

実際、百円ショップに入ると、安さにひかれて、しこたま買い込んでしまい、自分でもさもしいような気分になってしまふ。

バーゲン・セールなどでも、我先にと品物を取り合っている姿は、みつともない。

安ければ安いほどよいと考えるのは、心身に余り良い作用を及ぼさない。

第百五十四段

あの人はトップ・セールスマンだとも言われると、なんとなく胡散臭く見える。

トップ・セールスマンになるには、滔々と口が上手

でなければならぬ。一見誠実そうだが、なんとかして物を一番多く売って、金をたんまり儲けなければならぬのだから、誠実ではありえない。顔は柔和な仏だが、内面は夜叉の如く冷酷非情に計算高くなければならぬ。

トップ・セールスマンなどとは、友達にならない方がよい。

第百五十五段

死んだらああしてくれ、こうしてくれと言うのは無駄なことである。

私も死んだ時、告別式の時は、モーツアルトのピアノ協奏曲第二十三番イ長調の第二樂章をCDで流してくれ、花は白菊でなく赤い薔薇ばらに、供え物はブルゴーニュの赤ワインにしてくれなどと家族に書いておいたが、最近、破り捨ててしまった。

死者はおとなしく完全に死んでおれば、それで、良い。

第百五十六段

勝負ごとでも試合の決勝戦でも、どちらが勝つか負けるか前もって分っていたら面白くない。分からないからこそ、はらはらどきどきして見ておられるし、そ

れがまた楽しい。

人生は勝ち負けではないが、いつ自分が死ぬか、何年の何月何日と分かっていたら、人生の楽しみは半減どころか、千分の一ぐらいになってしまう。分からないからこそ、生きておられる。

全知全能の神様なら何でも知っているかもしれないが、これだけは教えて貰いたくない。

第五百七段

江戸時代の画家・久隅守景の〈夕顔棚納涼図〉は国宝なので、多くの人が知っていると思う。

私も夏になると縮小版のレプリカ物だが、取り出して一度は見たくなる。

夕顔棚の下のござに、薄物をまとった男が顎を片手に腹這いになっている。下座の方に上半身裸のふくよかな女が座り、真中に男の子がちよこなんと、家族三人で夕涼みをしている絵である。

家族のしみじみとした幸せを描いてこれ以上の傑作はないと、眺めているこちらの方が清清して涼しい幸せな気分になる。

そしてこの絵を見るたびに、私は必ず一つの詩を思い出して口遊くちずまむ。

今から二十年ほど前にある新聞で見つけた子供の

投稿詩である。どこの人であったか忘れてしまったが、

いい名前だったので、風見悦子ちゃんという名前だけは今でも憶えている。まだ三歳というので、これも驚いた。きっと悦ちゃんが眩いたのを、親のどちらかが書き留めて投稿したのであろう。その眩きが、そのまま詩になっているのである。

〈夕顔棚納涼図〉は絵で描いた「幸せ」の次だが、悦ちゃんの詩は言葉で書いた〈幸せ〉図の最高傑作である。

おはなし 風見 悦子

むかし むかし

あるところに

えっちゃんと

おとうさんと

おかあさんと

いちろう(弟)と

ちぼくん(犬)が

いました

めでたし めでたし

第百五十八段

〈おい痛め 酌みかはさうぜ 秋の酒〉は、作家・江国滋氏の食道癌・闘病日誌だが、この本の最期の方に出て来る次の句には、ショックを受ける。

死に尊厳なぞといふものなし残暑

苦痛に呻吟してのたうち死に行く身から出た本音の最期の叫びであろう。

このような人々に対して周りの人々は、軽々しく尊厳死などと言ってはならない。特に医師は、慎重でなければならぬ。

第百五十九段

生きて行くのに必要な食物は、ほんの僅かで間に合う。余り食わない方が、病気にもならない。

「多々ますます弁ず」ではない。

生きて行くのに必要な情報は、ほんの僅かで間に合う。

「知らぬが仏」である。

(つづく)

象徴(シンボル)への航海

〜もつ一つの世界〜

◎ 鎌 上 宏

一、本論『シンボルへの航海』

(二九六六年「美術出版社」のち「講談社文芸文庫」)

第三章 手の変幻への繋がりとしての本体、

仏陀の「青眼」のこと

序章一 手の変幻、ウオーリーのこと(その二承前)

ゴミ掃除宇宙ロボット・ウオーリーの性格は、好奇心旺盛でちよつと寂しがり屋で、長い年月の間に感情を持つというシステムエラーが生じた。ウオーリーは荒れ果てた地球で、仕事の傍ら趣味でゴミの山の中から宝物を集めている。その宝物の一つのミュージカル『ハロー・ドーリー!』のビデオに憧れ、いつか誰かと「手」をつなぐことを夢みている。

ある日上空から巨大な宇宙船が着陸し、中から白く輝くロボット・イヴが現れ、周囲を探索し始める。ウオーリーは、地球にやって来たその流水の天子クリオネのような超最新型ロボット・イヴに一目惚れしイヴの手が気になる。そして彼女と手をつなぐことを望むようになり、イヴが宇宙船に回収されしまうとイヴを追いかけて宇宙船に乗り込み、様々なトラブルを巻き起こしていく。

ウオーリーのおかれた現実には、地球外生命の「命」を探索する宇宙船の中と変わり、実はウオーリーの宝物の一つである植木鉢の植物もイヴそのものの中に収納され、これが原因で様々なすったもんだが展開する。地球から紛れ込んだブーツ型植木鉢のウオーリーの宝物「植物」を取り戻すウオーリーと、宇宙ロボットとして生命を探索するように回路に書き込まれているロボット・イヴは、地球外生命を探索する任命を受けて彷徨っている宇宙船の中である。身近な青い鳥を知らずに遠い所の青い鳥を探す物語なのが、ウオーリーは船外に放出されそうな所をイヴが手をさしのべ、宇宙の藻屑にならずに命拾いをする。そして、緑の生命のたった一つの苗を、ウオーリーは身を挺して守るのだが、宇宙船そのものを救う場面でガタガタにつぶされ生命の火が消えそうになる。イヴは懸命に部品を交換して甦らせようとし、イヴはウオーリーが憧れていて果たすことが出来ずにいた「手をつなぐ」行為に出て、指を絡ませることでウオーリーのいのちはまた眼の中に甦るのだった。ウオーリー垂涎のシンボリックな「手を繋ぐ」というクライマックス・シーンが描かれている。「二九世紀に残された

ロボットウオーリーの夢と冒険」と副題にあるその「夢」が盛られており、いのちといのちの交流として手と手を握り合うことが象徴的に描かれ、とてもとてもおもしろい物語である。ところで「ウォーリー (Wall・e)」は「Worry (気に病む、案じるetc)」という意味が隠されているのではないかと思うのである。

第一節 生誕地の「青眼」(マヤ寺院の青眼と原論)

(一) ルンビニーにて

、一二年二月、ネパールのルンビニーを訪ねた時のことである。ルンビニーは、今はネパール国にあり、釈迦の八大仏跡の一つ、生誕聖地である。釈尊生誕地なので母親のマヤ夫人をまつる「マヤ・デヴィ寺院」建てられ、各国の熱心な仏教徒が参詣している。インド国境を越えてから寺院を望み見た時、青空に金色に象られた寺院の上の塔が映え、その塔の四面にマンガ模様の両眼が描かれていた。仏教の聖地には様々な象徴的デザインがあるだろうと想像はしていたが、生誕寺院にお釈迦様の眼が描かれていたことに感動した。

マヤ夫人は、夫シュッドータナ王(浄飯王)の宮殿から実家のあるヒマラヤ山麓、現在のネパール国の中インド迦毘羅國に戻って出産をしようと帰省中であつた。ルンビニ園で休憩し、無憂樹の枝の花にふれようと右手を挙げた折り、ゴータマ・シタールだはお生まれになったと伝えられている。

今は、そこに「マヤ寺院」があり、その寺院の屋根の隅には仏旗がへんぼんと翻り、中央の仏塔から釈尊の青眼が四方を見渡しているのである。

(二) 石像の容貌

先の稿で仏像の「成立・出現」を見てきたが、金色に輝く像に続いてここでは異なる特徴について述べようとしている。

今から説き起こすことは、「仏陀像」「仏像」の「眼」についてである。

仏教の論書『大智度論』(二世紀頃の龍樹著『摩訶般若波羅蜜経(般若経)』の注釈書)に「佛の三十二相」を収め、その第二十九相は「真青眼相」を記している。そこで「眼は青蓮華のように紺青である」と記している。

インドの仏像は、一一年、一二年にガンジス河沿いを訪問したが、その地域の仏教遺跡群の仏像、釈尊像、観音菩薩像などは眼を見開いている。ガンダーラ仏、マトゥーラ仏で、釈尊像出現以前の台座や菩提樹などの象徴的な象り以降は成道後の仏陀像、仏頭がほとんどで、その釈迦牟尼如来像の容貌は端正で、「如来」らしい深い悟りの静謐さをたたえている。

釈尊像はその偉容が包含する精神性を発露してはいるが、日本の鎌倉期以降の木造、乾漆像のようなき細かい精神性を込めた眼をもって象られているわけではないように思われる。如来像同士の静謐な眼付きと容貌を対比しても、

日本の如来像、まして興福寺の無著・世親像や阿修羅像のように眼を中心に深い精神性がその容貌に刻まれているわけではない。インド西海岸のエレファンタ島、エローラ、アジャンタの石窟に、一三年二月訪ねたが、ヒンズー像をはじめ仏像はアジャンタ壁画を除いては眼を閉じており、尊像全体が発露するもの以上ではないように思われる。

一般的に初期の仏像は眼を大きく見開き、遙か遠くを見る。やがて半眼に表されるようになるが、これは大乘仏教による内観、内省を意味しているとされている。また、如来、菩薩、明王、天の諸像は、その悟りの内容によって像の形が異なることを仏教伝来の道筋で改めて稿を起すことがあるだろう。しかし、古代中国の「兵馬俑」の兵卒の容貌はそのモデルと思しき民族的氣質が表現されており、仏像流伝の系譜は丁寧になぞっていかなければならないと思われる。ここでは人間ゴータマが、成道し釈尊となった前後の眼付きについてふれてみたい。

第二節 「開眼」するまでーゴータマ・シッタルダの成道

(一) アシタ仙人の占い

嫡子誕生に喜びあふれるシュッドーダナ王は王宮や香や美しい花で飾り、主立ったバラモンたちを招きバラモン法典に従い命名式が行われた。王子は「目的を達成するもの」という意味のシッタールタ(悉達多)と命名された。バラモンたちはシッタールタ王子の運勢を観想し、三十二の吉

兆を見いだし、在家の生活をすれば天下を統一する理想の王である転輪聖王となり、出家すれば開悟してブツダとなるであろう、と占った。

霊山で座禪・瞑想に耽っていた賢人アシタ仙人は、シュッドーダナ王の宮殿に駆けつけて王子を抱きかかえ、「この童子は最高の悟りに達するであろう。この人は最上の清浄を見、多くの人々の利益をはかり、あわれみの心を持ち、真理を説き、この人の清らかな教えは広くひろまるであろう」といった。(『ブツダの旅』丸山 勇、以下同じ)

(二) 苦行

衣服は身体に着けず裸で過ごし、特別な施しは受けず、酒は飲まず、魚や肉は食せず、心の働きを一点に集中させる精神統一の行や、呼吸をコントロールして停止させる止息禪の行、一定期間立ち続ける不坐の行、棘のある床に横たわる行、常にうづくまる蹲踞の行、朝、昼、夜と一日三回の水浴の行、孤独行などを実践した。また、一日一食、二日に一食、七日に一食と減食し、次第に生米一粒、胡麻の実一粒、やがて一切の食を断つ、断食苦行を行った。

(三) スジャータの乳粥供養(苦行放棄)

釈尊は、これまでに二つの極端な経験をしてきた。一方は出家の動機となったカピラ城での欲望の赴くまま快樂を貪る世俗の生活、もう一方はウルヴェーラーでの死の淵に

いたる厳しい苦行の実践。そして、ゴータマは快樂主義と苦行主義の二つの両極端な生活を捨て去ること（中道）にし、六年余にわたる苦行生活に終止符を打った。苦行を放棄した釈尊は、村娘スジャータから乳粥の供養を受けて体力を回復させ、禪定による悟りの行に大きく転換した。

「ガヤー・カーシヤパが火に事えた所より東して大河（尼連禪河）を渡り、プラークボーディ山（前正覚山）にいたる。如來（釈尊）は修行すること六年に及んだが、まだ悟りをひらかなかつた。その後、苦行を断念し乳粥を受けた。東北より進みこの山に目をやると幽寂の感あり、ここで悟りをひらこうと思つた。」これは当地を訪れた玄奘三蔵の記録である。

（四）釈尊成道の地―ブツダガヤー

現在もヒンズー教の聖地であるヴァーラーナシーから東へ二四〇キロ、ビハール州都パトナーから南へ一七〇キロ、ガヤー市の南を流れる尼連禪河の西岸が釈迦成道の地ブツダガヤーである。ブツダガヤー大塔の北面に、経行処（きんひんじょ）という台座に十九個の蓮華の花が一列に並んでいる。釈尊が成道後、菩提樹のもとを離れ、七日ごとく場所を変え、四十九日間、解脱の喜びを味わいながら散策したといわれ、その足跡から一輪ずつ蓮華の花が咲いたという伝説を象徴的に表している。

第三節 ゴータマの開眼と成道

（一）「開眼」の場

釈尊は坐禪、瞑想で何を悟つたか。ふつうは釈尊が「十二因縁」の理を觀じ悟つたとされるが、しかし十二因縁説より以前に簡単な縁起説が立証されていて、種々の縁起説の最後に十二因縁説が成立したと中村元は『釈尊の生涯』で指摘している。やや細部に踏み込む文言となるが、禪定で得たもの、「觀たもの」をかいつまんで述べたい。

釈尊が、バラモン僧に語つた言葉に次のものがある。

*

初禪で身体は軽やかに心は統一され、欲望を離れ、不善を離れ、粗で微細な思慮があつて遠離から生じた喜樂があつた。第二禪で、粗なる思慮と微細な思慮が止滅して内心が統一静安し喜樂を成就した。第三禪で、喜びに染まないために、平静（無関心）で正しく気づかつた。第四禪で、喜びと憂いとを滅したので不苦不樂の禪を成就した。（『釈尊の生涯』中村元、以下同じ）

*

第五禪は、心が統一され、清淨で、柔らかで不動となつたときに、過去の生涯を思い起こす智に心を向けた。かくして種々の過去の生涯を思い起こした。『一つの生涯、二つの生涯、三つの生涯、四つの生涯、五つの生涯、十の生涯、二十の生涯、三十の生涯、四十の生涯、五十の生涯、百の

生涯、千の生涯、百千の生涯を、幾多の宇宙成立前期、幾多の宇宙破壊期、幾多の宇宙成立破壊期を。われはそこにおいて、これこれの名であり、これこれの姓であり、これこれの種姓であり、これこれの食をとり、これこれの苦樂を感受し、これこれの死に方をした。そこで死んでから、かしくに生まれた。』と。

かくのごとく、我はその一々の相および詳細の状況とともに幾多の過去の生涯を思い起こした。これが夜の初更において達せられた第一の明知である。ここに無明が滅びて明知が生じた。暗闇が消滅して光明が生じた。

*

かくのごとく心が統一され、清浄で、柔らかで不動となつたときに、もろもろの生存者が死にまた生まれるのを見た。すなわち卑賤なるものと高貴なるもの、美しいものと醜いもの、幸福なものと不幸なもの、としてもろもろの生存者がそれぞれの業に従っているのを見た。『じつにこれらの生存者は身に悪行をなし、心に悪行をなし、もろもろの聖者をそしり、邪った見解をいだき、邪った見解にもとづく行為をなす。彼らは身体が破壊して死んだ後で、悪しきところ、墮ちたところ、地獄に生まれる。また他のこれらの生存者は、身に善行をなし、言葉に善行をなし、心に善行をなし、もろもろの聖者をそしらず、正しい見解をいだき、正しい見解に基づく行為をなす。彼らは身体が破壊して死んだ後で、善いところ、天の世界に生まれる。』と。

我はかくのごとく清浄で超人的な天眼をもって、もろもろの生存者が死に生まれるのを見た。すなわち卑賤なるも

のと高貴なるもの、美しいものと醜いもの、幸福なもの、不幸なもの、としてもろもろの生存者がそれぞれの業に従っているのを見た。バラモンよ、これは我が夜の中更（第二更）に達した第二の明知である。ここに無明が滅して、明知が生じたのである。暗闇は消滅して光明が生じた。

*

かくのごとく心が統一され、清浄で、柔らかで不動になつたときに、もろもろの汚れを滅す智（漏尽智）に心を向けた。そこでこの（いっさいは）苦であるが如実に知った。我はかくのごとく知り、かくのごとく見たときに、心は欲の汚れから解脱し、心は無明の汚れから解脱した。解脱し終わつた時に、『解脱した』という智が起つた。『生は尽き果てた。清浄行が完成した。なすべきことはすでになされた。もはやかかる生存の状態に達することはない。』と知り終わった。バラモンよ、これが夜の最後の更（第三更）において達せられた第三の明知である。ここに無明が滅びて、明知が生じたのである。暗闇は生滅して光明が生じた。

（二）「観る眼」の獲得

「この經典の文句は非常に長たらしいが、四種の禪定を完成して衆生の運命を見極めたというところから帰する。とくに肉眼をもって神の本性を見ることは出来ないから『天眼をもって見よ。』という教えは、インド教の国民的聖典バガバッド・ギーターに説かれおり、仏教もこれと同じような思想を取り入れているのである。

また他の經典では、『我が正覚よりも以前に、いまだ悟りを開かず、ボーディサッタであつたときに、このように考えた。今我はそれぞれ二種類にして思慮のうちにとどまらう。欲の思慮と、瞋りの思慮と、害の思慮を一つの部分とし、離欲の思慮、無瞋の思慮、無害の思慮を第二の部分とした。』とあり、そのあとで四禪を成就したことをいうが、その内容は前に引用した文句とほぼ同じである。他の經典でも同様にいう。しかし、その四禪の説は古い詩句のうちには述べられていないから、おそらく仏教がかなり発達してから以上のような長々しい經典の説明も成立したのであらう。」と、中村元は『釈尊の生涯』で言う。

「幾千の生涯を想い、その死に方をし、そこから生まれた」というこの「幾千の生涯」を見る仏陀は、「眼ある人」(「スッタニパータ」四〇五)と讃えられ、記述され具体的に示されている。

ただ、中村元は指摘している。「眼ある人」ということについて、あるときマガダ国王舎城の国王ビンビサーラは、仏陀が王舎城に来る折り、優れた相好にみちて「眼を下に向けている」と讃えているという記述が「スッタニパータ」にあるが、「当時の出家遍歴行者の作法に従っているのである。彼らは路上の虫けらさえも踏み殺さないように道路の上を注視しながら気をつけて歩かなければならぬ」と指摘し、バラモン教の法典もジャイナ教の戒律もともに、紀元前六世紀から前二世紀頃に編纂され始めたヒンズー教の『マヌ法典』に規定されているとその始原を明らかにしている。

*

くりかえしになるが、瞑想の内容をまとめてみよう。

初更に第一の明知

(幾多の過去の生涯を思い起こして、無明が滅び光明、明知が生じた。)

中更に第二の明知

(清浄で超人的な天眼をもつて、もろもろの生存者が死にまた生まれるのを見た。)

三更に第三の明知

(もろもろの汚れを滅す智(漏尽智)に心を向けた。そこでこの一切は苦であると如実に知った。)

つまるところ「眼ある」は、インド古来の「天眼」をさし、その神通力的な無限の想像力豊かで論理的な思惟力を指すということになる。初更に過去、中更に現在を觀て、そして三更に現在とこれからの人のあり方について正覚を得たということであろうか。

*

「眼ある人」と釈尊をさす語句は、他の原始經典にも多く見かけることが出来る。

例えば南方でのパーヴァリンの弟子たち一斉の帰依(集團帰依)について述べる『彼岸の道(パーラーヤナ篇)』でも仏陀をさして語られる。

(註) これらの詩句はアシヨカ王の紀元前二六八

二二三年以前に成立。

『スッタニパータ』(原始仏教最初期―最古の典籍)の中でも、最古層に属するアッタカ編とパー

ラーヤナ編の禪定内容の相違について、中村元はアッタカ編よりパーラーヤナ編の方がより古いと見ている。

第四節 描かれた「青眼」――「原始仏典」あれこれ

(一) 「青眼の眼」は人の世に何を見ているのか。

『人生の眞実相「無常」と「空」、そして「清浄」を觀でいる。

「かれは欲望の享樂に耽らない。またその心は濁っていない。すべての迷妄を超えている。目ざめた人は諸々の事柄を明らかに見る目をもっている。」(『スッタニパータ』ブツダのことは『一六一』)

また、同じく「つくられたもろもろのものは無常であると智慧をもつて見るときは、もろもろの苦惱を離れる。これは清浄に至る道である。つくられたもろもろのものは苦惱であると智慧をもつて見るときは、もろもろの苦惱を離れる。

これは清浄に至る道である。そしてつくられたもろもろのものは実体がなく智慧をもつて見るときは、もろもろの苦惱を離れる。これは清浄に至る道である。」(『ダンマパダ』眞理のことは『二七七〜二七九』とも言っている。

「脚下に広がる思議を超えた世界、…そういう分別を超えた世界とは何か。その世界をわれわれ凡夫は見る事が出来ない。仏陀のみこれを観ることが出来たのだ。明知を具えている仏陀のみ不思議の世界を見る眼をもつていたの

である。」と鎌田茂雄は、この稿にふさわしい題名の『仏陀の觀たもの』で述べている。

*

この智慧をもつて觀たもの、「これは漢訳で言うならば、『諸行無常、諸法無我、一切皆苦』といわれるものである。『一切皆苦』の『苦』は、つくられたもので、『苦』の意味は、思いどおりにならないということなのだ。もとの言葉で『ドウツカ (dukkha)』、といい、世の中のことは人間の思いどおりにはなかなかいかないという眞理、生の在りようをいっている」と中村元は解説している。

言いかえれば、人生そのものの『苦』(変えられない、逃れられない生命の苦)を見ぬくと同時に、社会の苦(変えうる社会苦)のありようを見ぬいて、釈尊は人がなし得る、是正しうる、正しうるあり方、『法』を説いているのである。

鎌田はこのように言う。「このように眞実を觀る眼をもつたならば、世界苦を自己の一身に担うようになる。それが仏陀である。世界苦を認識した時、仏陀は無限の慈悲を持つに至る。悲しいとか嬉しいとかいう気持ちを超えたところに平等な大慈悲の発現が可能となる。どうにもならぬ非人間的な理法を觀れば觀るほど、無限の大慈悲が湧き出してくるのではないか。觀世音菩薩のお顔を觀よ。柔和な微笑の中に凜とした侵すべからざる勇気を見ることが出来る。」(同 鎌田茂雄)

(二) 描写としての仏陀

「眼清らかに光輝あり」の対比

『スッタニパータ』古層の短編(B C二六八以前)、「第三 大いなる章、七 セーラ」から中村元博士と渡辺照宏博士の詩文訳対比を掲げてみよう。「スッタニパータ詩」は、紀元前二六八以前で、その「スッタニパータ散文」は、紀元前二五〇―一五〇年頃とされる。つまり釈迦が生存していた頃に近く、後世の脚色が余程少ないの記述であるということだ。

中村元訳 五五〇「あなたは眼清らかに顔もみめよく、身体は大きく、端正で、光輝あり、道の人の群れの中にあつて、太陽のように輝きます。」

渡辺照宏訳 五五〇「眼は澄み、顔は美しく、恰幅よく、まっすぐに立ち、輝き、修行者の群れの中央にあつて太陽のごとく照りわたる。」

(三) 仏教の「行」(行為)ということ、

「利行・施与」のこと

中村元は原始仏典の『サンユッタ・ニカーヤ』を引いて、生きる心がまえを解説している。「人はどうかすると、もの惜しみをしがちだが、仏陀のサーバッテイ市のジュエータ林、(孤独なる人々に食を給する長者)の園(祇園精舎)の事例を引き、むしろ積極的に人々に何ものかを施し、与え

て奉仕せよという。中村元は明瞭に言う。「現世は見えるだけの領域。けれどもわれわれは見える領域の現世を超えた、非常に広い深い見通しの中に置かれている。功德を積めば、自ずからその徳がわれわれの目に見えないところで生きてくる、そのことを言っている。『徳孤ならず』と昔からいうのはこのことである。有意義な価値のあるものでも、生かさなければ、死んでしまうわけです。けれども、お互いに人々が助け合つて進むならば、その功德は滅びない。」と。釈尊が古代インド社会にあつて説いた「心のデザイン」の大きな形、「シンボル」は「道徳としての、分かち合うこと―施与―ということ」であると中村元は説いているのである。

*

鎌田茂雄は『仏陀の観たもの』のなかで、「仏陀は誠に非人間的なあまりにも恐ろしい理法を観たのであった。……あまりにも冷厳な現実の中に生きねばならぬことを悟ったからこそ、この世界苦を慈悲の心に転ずる以外、他にいかなる方法もありはしなかったのだ。」と述べている。

(四) お経に現れた釈尊の眼

毎朝の勤行で私は「観音経」を専らお唱えているが、観音経は紀元後二世紀の初期経典に属し、観音経を含む「法華経」は釈尊が靈樹山で説いたと伝えられているものである。観世音菩薩、又は観自在菩薩は観ることを専門とする菩薩なので、大まかに述べては語弊のそしりもあるかもしれないが、『般若心経(大本)』に説かれるように釈迦牟尼

如来の能力の特化した菩薩としてこの稿ですこしふれたい。
『観音経』「観世音菩薩普門品第二十五」～「妙法蓮華経第二十四あらゆる方向に顔を向けた、自在に観るもの」の神変についての教説」について、釈迦牟尼世尊と観世音菩薩（＝観自在菩薩）とのやり取りが述べられている箇所がある。

*

「その時、不滅の心を持つもの（無尽意）という偉大な人である菩薩は、席から立ち上がった、上衣を一方の肩だけ露わにして、右の膝頭を地面につけて、世尊のおられるところに向かつて合掌して敬礼し、世尊にこのように申し上げた。『世尊よ、いかなる理由で、自在に観るもの（観世音）という偉大な人である菩薩は、自在に観る観世尊は偉大な無尽意菩薩にこのようにおっしゃられた。『良家の息子よ、この世において諸々の苦を受けているところの幾百・千・ナユタもの多くの衆生たちが、もしも、自在に観る観世音』という偉大な人である菩薩の名前を聞くならば、それら衆生たちはすべて、その苦の魂から解放されるであろう。』

『自在に観る観世音』は、衆生たちが、幾百もの多くの苦しみに悩まされ、多くの苦しみに苛まれているのを見て、省察して、勝れた知の力を持っている。それ故に、自在に観る観世音』は、神々に伴われた世間において救済者なのである。『自在に観る観世音』は、神通力を極めるに到っており、広大な知と巧みな方便を既に学んでいて、十方に

おけるすべての世界のあらゆる国土に余すことなく現れるのである。また、地獄や、畜生界、ヤマ（閻魔）の支配下にあつて、不遇や、悪しき境遇（悪趣）に対する恐怖をいだき、生・老・病の苦しみによつて苛まれているところの生命あるものたちにとつて、それらの恐怖や苦しきは順次に消滅するのだ」と。〔法華経〕上、植野雅俊訳 岩波書店

要するに、観世音菩薩は多くの衆生の苦しみを見る力がある。そして、その苦しみを省察し解決する広大な知と巧みな方便を持っていて、菩薩の名を聞くだけで魂は救われる、と。

*

「すると、不滅の心を持つ無尽意菩薩は、心が歓喜して満足して、次の詩句（偈）を述べた。」

『観音経』「観世音菩薩普門品第二十五」偈（漢訳）

……眞観清浄観 廣大智慧観 悲観及慈観 常願常瞻仰 無垢清浄光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間 悲體戒雷震 慈意妙大曇 慈意妙大雲 澍甘露法雨 滅除煩惱焰・・

（和訳）眞観・清浄観・广大智慧観・悲観及び慈観あり。常に願ひ、常に瞻仰すべし。無垢清浄の光あつて、慧日、諸の闇を破し、能く災いの風火を伏して、普く明らかに世間を照らす。悲体の戒は雷震のごとく、慈意の妙は大雲のごとく、甘露の法雨を澍ぎ、煩惱の焰を滅除す。

（現代語訳）「法華経 下」梵漢和対照・現代語訳（植木雅俊訳 岩波書店）

「麗しい眼、慈しみの眼を持ち、智慧と知によって卓越した眼を持つ人よ、憐憫の眼を持ち、清らかな眼を持つ人よ、愛されるべき美しい顔と美しい眼を持つ人よ。(二〇)

純粹無垢にして清浄な輝きを持つ人よ、暗闇のない知を持つ人よ、太陽の輝きを持つ人よ、吹き消されることのない火焰の光りを持つ人よ、あなた(シヤキヤムニ)は自ら輝きながら世間を照らしておられます。(二一)

憐憫の徳と慈しみの雷鳴を響かせ、勝れた徳を具えた、慈しみの心を持つ大いなる曇よ、あなたは、不死の甘露の法(真理の教え)の雨を降らせ、生命あるものたちの煩惱の火を鎮められます。(二二)

(註) 漢訳、チベット訳、ケンブリッジ大学図書館所蔵写本、河口慧海氏招来の写真頒布本等ではこの一文は欠落している。従って以下の偈も、前文の偈と同じ無尽意の語る観世音を指すと註されている。《植村註》

欠落の構成をふまえて、現代語訳は「智慧と知による眼」をもつ釈尊(又は観世音菩薩)は、苦の救済のために「慈しみ(行)」を説いて煩惱に火を鎮めている、と。

*
微細な補足になるが、観世音菩薩は日本では阿弥陀如来を中尊とし、その左右に左脇侍の観音菩薩と、右脇侍の勢至菩薩を配する三尊形式として祀られる。

観音菩薩は阿弥陀如来の「慈悲」をあらわす化身とされ、勢至菩薩は「智慧」をあらわす化身とされる。

インドの紀元五世紀のアジャンター石窟群第一窟、エローラ石窟群などの例では、主尊の左側に蓮華手菩薩、右側に

金剛手菩薩を配している。蓮華手菩薩は蓮華を持つので観世音菩薩と想定されているのではないか。

第五節 観る眼の意義とまとめ

(一) 日本の高僧、会達の言葉。

i 道元(一一〇〇～一二五三『正法眼蔵』)

超能力はいらないとして「眼睛裏蔵身」ということを遺している。「眼睛裏蔵身」とは、眼が身、身が眼になつていなければならぬということ。「原始仏教經典」で、「比丘等よ、何をか、如来の現等覚せる所の、眼を生じ、智を生じ、寂靜・証智・等覚・涅槃に資する中道となすや。これ即ち八聖道なり。謂く、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。」と成道後の実践として「八正道」をあげ、必ず最初に「正見」ということをあげる。

ii 沢庵宗彭(一五七三～一六四六『沢庵禪師法語』)

眼には観の目と見の目があるという。この二つの目に「観の目つよく、見の目よはく」と観の目が大切だということとを言っている。見の目というのは目許で見る事、観の目というのは心で見るとことである。沢庵は「心のまなこにて見るを、観と申す也」という。

iii 宮本武蔵(一五八四～一六四五『五輪書』)

「心意二つの心のみがき、観見二つの眼をとき、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空とする

べき也。」と「空の巻」で述べ、「目の付けやうは、大きに
広く付ける目也。観見二つの事、観の目つよく、見の目よ
はく、遠き所を近く見、近き所を遠く見る事兵法の専ら也。」
と「水の巻」で述べている。

iv 慈雲尊者飲光（一七一八〜一八〇四）

「正法とは経・律・論を多く記したを云ふでない。神通
あるを云ふでない。光明を放つを云ふでない。無碍弁舌を
云ふない。向上なるを云ふでない。唯仏の行はせられた通
りに行ひ、仏の思惟あらせられたとおりに思惟するを云ふ。
仏の思惟し行はせられた通りとは、近くは八正道じゃ」

v 二宮尊徳（一七八七〜一八五六）『二宮尊徳夜話』

「それ天地の真理は、見えざるものなり。この不書の経
文を見るには、肉眼を以て一度見渡して、しかしてのち肉
眼を閉じ、心眼をひらきてよく見るべし。いかなる微細の
理も見えざることなし。肉眼の見るところはかぎりあり。
心眼の見るところは限なければなり。」

(二) まとめ

「眼ある人」という尊敬の言葉には、自分こそ自分の主
だと人の自立を尊ぶ立場と自覚した仏陀への敬意が込めら
れている。

「自己こそ自分の主である。他人がどうして自分の主で
あろうか？ 自己をよく整えたならば、得がたき主を得る。」

（原始仏典『ダンマパダ』真理のことは『一六〇』。同じこ
とを『ダンマパダ』は繰り返している。「己こそ己の主であ
る。己こそ己のよりどころである。それゆえに、馬商人が
良馬を制御するように己を制御するがよい。」（三八〇）

中村元は述べている、「…原始人はただ争っているだけ。
傷ついたり殺すのは当たり前のことだった。ところがある
時期に、人間の間に慈悲を説く教えが出てきて、そこで人
間の考え方がすっかり変わった。生活も変わり、さらにそ
れを信じている人の容貌までも変わってきている。これは
たいしたことだ。ただ、その力がずっと続いているとは言
えないので、今日でも相変わらず殺し合ったり争ったりし
ているわけで、それは原始人といっこう変わらないし、の
みならず動物以下じゃないか。…そういうふうなところで
慈悲の教えが説かれたということは、まことに尊いことだ。」
（『原始仏典』中村元）

今の時代から想像できない残酷な殺戮が繰り返されてお
り、非道の時代にあつて人間としての自覚が仏陀の悟りと
布教により時代は画され、一大覚醒されたと捉えることが
できる。

*

以上、この稿では仏陀の象徴的な「眼」について述べて
きた。しかし、釈尊の悟りの象徴として外見的に見ること
の出来る「眼」を、この程度で済ますわけにはいかないで
あろう。以下全てが釈尊の悟りの内容に関わるものとして、
今後も述べられていくことになる。

去来

◎大江利知

忘れてたりなんかしないよ
と 私が云う

あなたがいたから
私がいるのよ、
と

花はどこ？

花はどこ？

と探すように

死んだ猫を いつまでも訪ねる

ユーラシア世界の解決を探して

↳ テレビでコーランを読む子供達をみて

Thank to all

わたしを忘れないで
と あなたが云う

己の道を行こうとする
求道に近い精神
導いてあげられる人
それを「大人」というのだ

あなた

あいたい あなたがいる
けれど もう あえない あなただ
ひとみをとじてみる
ああ あなたが わらっている
いつも
あなたは そこにいてくれるんだね
いつも いつも いてくれるんだね
わたし わらった やつと
みあげれば 空が あおい
—空が あおいよ
わたしは あなたにいつてみた
空から わらいごえがした

春空

はつ春を寿ぐしては笑み交わす
逝った人とも
残れし人とも
青空はいつの時代（とき）でも青あをで
不思議に笑う あの空も青
生きるのに肩がこる日もあるけれど
何と青空はれ晴れとなれ
春だもの 良い匂いが空からする
春 良い事あるといいね 春
空の青 空の青と追いかけて
いつのまにやら 私まで 空

LETTER—尾崎豊に

私は君が亡くなってから

君を知った

もう二十年以上が経つ

学内で 君の名を耳にしたりはしたが

私は誰なのか分からなかった

君がこの世を去り

商品のように君の残したものが売られた

私は一枚のCDを買った

どうして？

と尋ねられれば

ただ聴いておきたい としか

応えられない

私は君の「世界」は理解できたようだった

そして 私の内の君に 君の心に近い

自分

を考えた

多分 リアルタイムで君を聴かなかつた
ということは

私は 君から逃げたのだということだ

わたしは その負い目を被うように
君のCDを買った

フィルムコンサートにも二度行った

歌う君の姿は 牙をむき

けれど なぜか

五歳の少年のような瞳をしていた

—どこへ行けばいい？

君は自分で道を探していたように思えた

LAST TEENAGE

APPPEARANCE

君が十代の最後に

代々木オリピックプールで催した

コンサートライブのCD

一九八五年の様子

もう三十年近く経った夜 聴いた

そして その最後の二曲

「I LOVE YOU」

「シェリー」

私は いつのまにか涙が流れていた

感傷でもない

感慨でもない

でも 涙が流れた

君が去った 今頃

共感というのは 不似合いだろうか

少年の君の歌声は

永遠に残るだろう

そして また 君の姿も

「シェリー」の最後のフレーズが

耳に こびりつき 反響した

シェリー 俺は歌う

愛すべきものすべてに

君は 今も歌い続けている

涙の行方

人は泣きながら 強くなってゆく

泣いた涙は しずかに渴いてゆく

ただ一筋の透きとほった跡にはなるが

いく度 泣いても 涙は涸れない

人は涙でつくられている

大きな海のように

悲しみは打ち寄せても

涙が それを やさしく包む

だから いつか笑えるんだ

悲しみが遠去かってゆく日は

いつなのかは わからないけれど

それまで そっと祈ろう

信じた人へ——遠い遠い人へ

ちいさな

ちいさな

星々に

光る命のいじらしさ

星の道を尋ねては

いつか行けると信じてる

いつか行けると信じてる

花の野の原 草原（くさはら）に

ひとり じっと佇んで

私を待っていてくれる人

私を待っていてくれる人

笑顔のやさしいその人は

心も とてもあたたかい

だから 私もあたたかい

だから 私もあたたかい

だから そっと ホッとする

ずっと ずっと会いたいと

祈り届いた 夢の人

祈り届いた 夢の人

いつから待っていてくれた？

君が産まれた時から と

しずかな声が 風のように

しずかな声が 風のように

風のようにおだやかで

微笑みながら 手を伸ばし

そっと野の花 折りました

そっと野の花 折りました

その野の花は月見草

私にゆっくり 下さった

髪にそっと さしながら

髪にそっと さしながら

笑顔のやさしい その人は
きつと ずっと分かつてる
誰より 私を分かつてる

誰より 私を分かつてる
私も その人分かつてる
ふたりで ずっといたいなど
初めて思った人だもの

初めて思った人だもの
私たちは行くんだわ
どんなに道が遠くても
たとえ星への道だとえ

詩 オムライス

◎尾崎まりえ

ネットで評判のお洒落なレストランで
オムライスを注文して待っている間
いっしょに行ったお兄ちゃんと
ひそひそ おしゃべりする

うす焼き卵で綺麗にくるんでなくちゃ
ふわとろが流行りみたいだけどな
ケチャップライスもいろいろよね
ソースが違うからさ
上にかけるのはトマトケチャップだけでいい
シンプルな料理こそ腕がわかるんだ

オムライスが湯気を立てて運ばれてきた
じーっと こっちを見ているお兄ちゃんに
食べごろに冷めたあたりで

ひと口分けてあげる

どう？この味

なかなかいける

家でもときどき作るのよ

上手くできるようになったか？

まあね

オカッパの頃からうちの店に来てたもんな

『キッチンエコー』のデミグラスソース

お兄ちゃんに何度せがんでも

にやにや笑ってレシピを教えてくれないから

まだ納得のオムライスが作れない

このレストランのだって

やっぱり一番じゃない

恨めしげにふくれてお兄ちゃんを睨むと

わたしを置き去りにして

さっさと 天国へ帰ってしまっただけ……合掌

詩
蒼い声

◎尾崎まりえ

満月の夜は布団をすっぱり被っても眠れない
降り積もった雪が照り返し
カーテンの隙間から蒼い声がしのび込む

物書きになると

肺病に罹って夭折するから

文芸部はやめなさい

女優になると

色恋に狂って自死するから

演劇部はやめなさい

作曲家になると

破天荒に暮らして早世するから

音楽部はやめなさい

女の子は華道部か茶道部が丁度いい

栄養たつぷりの弁当に

毎朝ふりかける母親の言葉は

ギシギシ嚙むたびに

伸びようともがく娘を縛る

セーラー服を脱いだ日には

丁度いい寸法の大人に仕上がっていた

——眠れなくても朝は来る

太陽が蒼い雪を融かし

透き通る水の影がゆらゆら立ち昇る

丁度いいあたりまで生きて

いつか

二十六歳の石川啄木や

三十二歳の松井須磨子や

三十五歳のモーツァルトに会えたら

きつと尋ねてみたい

「あなたの人生、不幸せでしたか？」

たぶん問い返される

「あなたの人生、幸せでしたか？」

もう正直に答えられるだろう

びっちら蓋を閉められたら最後

独りで眠る棺の中に

蒼い声が追いかけて来くることはない

『ご一新』再考

書かれて来た『明治維新』

◎岩井 哲

最近になって、これまで書かれることのなかった『ご一新』に関する様々な記述がみられるようになった。たとえば「無血開城」の舞台裏のこと。近代軍隊の萌芽などと褒めちぎられた「騎兵隊」が、実は幕府軍以上にバリバリの身分差別構造をもった組織であったこと。その創設者「高杉晋作」は公金横領の常習犯で無類の女好きだったこと。「吉田松陰と松下村塾」のこと。「日本の近代化のはじまり」の本当のこと。仙台寒風沢上陸以来横暴を重ねた「奥羽鎮撫総督府の参謀たち」のこと。それこそ一つひとつ数え上げたらきりが無い。隠されて来たのか、書けなかったのかは判然としないが、通説が覆ってしまうような史料の紹介や著作がやたら多く刊行され出している感じがする。

『明治維新』という表現も昭和になってからのもの

だそうで、本来は『ご一新』と表現されていた。勤王（皇）の志士などというもつともらしい表現も『天誅』という凄惨なテロに明け暮れていた長州藩過激派浪士たちの自称だったとのこと。

そのような数々の事柄が散見される著作のなかでもとくに原田伊織著『明治維新という過ち』（毎日ワンス刊）は、まったく新しい視座を提起している一書である。全編衝撃的な論考なのだが、なかでも「吉田松陰というウソ」には驚かされた。これまで常識であるかのように思い込んできた「吉田松陰像」は、実は明治になってから山縣有朋（狂介）が創作した物語＝虚像だということである。

吉田松陰という幻想

まず、史実として「松下村塾」は「吉田松陰」が作って運営し続けた私塾ではなく、叔父にあたる玉木文之進が天保十三年（一八四二）に始めた私塾であったこと。このあたりは幕末史に関心を持つものであれば了解ずみの事項であろうか。ここから先が衝撃的だ。その私塾を安政二年（一八五五）からわずか三年間だけ（二年十ヶ月間説もあり）吉田松陰が借り受け、今で言う「ダチ」を集めて、日々、攘夷だ、暗殺だ、と叫び、そこに集っていた「ダチ」（高杉晋作、久坂玄蕃、前原

一誠、山縣有朋、伊藤博文等）は、後に惨たらしいテロを繰り返すことになる長州過激派のリーダーとなつていく面々だったというのである。ちなみに、その松下村塾は、中断期間もあったが、玉木自身によつて明治二年（一八六九）に再開され、明治二十五年（一八九二）まで存続している。ただし、主宰者の玉木は明治九年（一八七六）、塾生・前原一誠の起こした「萩の乱」の責任をとつて自害している。

そして何と言つても一番の驚きは、通説では、あたかも朝廷から幕府にはなく直接水戸藩主・斎昭につかわされたとされる「戊午之密勅」に端を発した安政の大獄で、井伊直弼によつて処刑されたことになつている吉田松陰だが、それは事実とかなり異なつていこと。真相は、松陰が老中間部詮勝まなべあきかつを暗殺しようとした事実が露見し、長州藩が松陰を捕縛していること。その後身柄は江戸に送られ、日頃よりさまざまな「暗殺」を口にしてきた不審人物（無数にいた過激浪士の中の無名な一人としての吉田寅之助）として、幕府から長州藩へ人物照会と嫌疑の内容についての問い質しがあり、それに対し、長州藩自らが「斬首やむなし」との返答をしていたがゆえの斬首であつたこと。したがつて、井伊直弼は、吉田寅之助なる人物を、そもそも知らなかつたと考えられること。そして当時の長州藩にとつてさえ、吉田寅之助は厄介者であつたのだという

のである。

それにも関わらず、武力倒幕を果たしたのち、明治新国家建設を後世に物語るための《神話》創成が必要になつた時点で、かれらを含めた維新のひとつの「物語」として、吉田松陰のいたわずか三年の間に松下村塾に集つたそれぞれのメンバーたちを、維新のヒーローとして、日本軍閥の祖・山縣有朋が自らの創作による《神話》のなかにとりこんだというのである。

私たちが、教科書その他で、いつしか史実であるかのように自然にイメージしてきた吉田松陰像、ひいては幕末維新史全体は、原田氏の著書によれば、どこまでも怪しげな《神話》のようなものなのである。

さて、薩摩・長州の世になつた日本＝明治国家（新政府）のその後の歩みを概観すると、いくつかの民主憲法に近い草案がいくつか提出されたにもかかわらず絶対君主制を指向する明治欽定憲法が国是とされ、その後のわが国の命運を決定づけて行く。長州閥の支配する帝国陸軍を中軸として、朝鮮半島から満州を侵略し、カムチャッカから南方に至る広大なエリアに軍事進出して、ついにはポツダム宣言の受諾にまで至り、ある意味、いったん国家を滅ぼしたという紛れもない事実がみえてくるのである。

その道筋は、「北海道を開拓し、カムチャッカからオ

ホーヅク一帯を占拠し、琉球を日本領とし、朝鮮を属国とし、満州、台湾、フィリピンを領有すべきだ。それを実現することこそが「大和魂だ」とする吉田松陰が想い描いた馬鹿げた外交政策とおおむね一致するものであった、と原田伊織は同著で教えてくれている。その意味から言えば、吉田松陰は日本軍国主義の祖であったという言い方も可能なのだろうか。

このような歴史観は衝撃的でさえある。吉田松陰が今なお祀り上げられる理由もそこにある。祀り上げなければ明治から昭和まで連綿と繰り返された日本軍国主義の拡張主義を自ら否定することにつながってしまうからにはかならない。私たちはもつと巨視的に歴史を見る眼を養う必要があるようである。

このように、これまで定説化されてきた薩長史観による歴史記述の内容が積極的に再検討され始めている観がある。もちろんこれまでも数多く「敗者」の視点から書かれた幕末維新論はあったが、それらは部分的な修正作業にとどまっている印象にあった。が、正史自体を根底から書き直そうという意欲によってまとめられた力作とあっていいのが『明治維新という過ち』一書ということになる。

説明のつかない幕末の激流

「明治維新」とは、黒船来航以降社会矛盾が山積し、政権維持が困難となった第十五代将軍徳川慶喜が朝廷に政権を返上（大政奉還）、次いで「王政復古の大号令」によってすんなりと天皇を頂点とした新政府ができ、さっそく明治天皇による「五箇条の御誓文」の発表に至った。一部、西南戦争などのくすぶりも若干あったが、それを乗り越えわが国はようやく近代化への歩みを始めた、そんなふうにならなければならぬのだが、実際はどうもかなり違っているようだ。

もし教わってきた通りなら、なぜ「王政復古の大号令」から間もないタイミンで立て続けに「薩摩藩邸焼き討ち事件」や「鳥羽・伏見の戦い」、果ては「戊辰戦争」「函館戦争」といった悲惨な戦いが起こってしまったのか、その流れも含めてまったく説明がつかないのだ。イメージでは「王政復古の大号令」の後、政治的な駆け引きは無用となり、肅々と朝廷を中心とした政府において新しい国づくりのための政がすすめられていてもいいはずだった。ところが、大げさに言えば鎌倉時代以降行政のシステムもノウハウも持たないできた朝廷は、ひきつづき徳川慶喜に対し執権の一部（とくに対外政策など）を肩代わりさせるほかなく、ひいて

は小御所会議において、「四賢候」のひとり土佐藩主山内容堂らの親徳川慶喜的発言を牽制して吐かれた西郷隆盛の恫喝「短刀一本あればかたがつくではないか」で強引にかたをつけたはずの慶喜に対する「辞官納地」の命令も、何一つ実体化されることはなかったのである。

調べてみると「王政復古の大号令」という軍事クーデターは完全に失敗に終わっているのだ。だからこそ、それ以後さまざまな戦乱が引き起こされることになったのである。岩倉具視そして大久保利通と西郷隆盛らはおもわぬ事態の進展に困惑し、異なる方法での武力討幕の策を考えなければならぬ状況に追い込まれていったのである。その第一歩として打ち出した策が江戸市中を混乱に陥れることだった。西郷隆盛は赤報隊の相楽総三等に薩摩藩邸を拠点として使わせ、放火、略奪などあらゆる手段で実践し、幕府を挑発しつづけたのである。それによって勃発したのが「薩摩藩邸焼き討ち事件」であった。

ところで、「王政復古の大号令」に先んじて岩倉具視らによって画策された「討幕の密勅」（徳川慶喜はこれをおそれて大政奉還を決断したとも言われている）も現在では偽の勅書であったことが判明しており、これまで教わってきた明治維新史は根本から疑がってしまわなければならない。べき「虚史」といってよい代物として見えてきている。

これまでの維新史がくつがえされ、ヒーローと言われて来た人物たちが、実は節操のない過激なテロリストたちだったとすれば、その後に出て来た新国家＝明治国家に品格を求める方がそもそもむずかしいことになる。それこそ、戦争に明け暮れた歴史がそれを物語るのかもしれない。

そればかりではない、明治新政府を樹立した勢力（過激な攘夷派の公家や薩長土肥が中心）は、討幕の名目として「尊王攘夷」（天皇を尊び得体の知れない外国人を排斥する）を叫んでいたが、「戊辰戦争」そして「函館戦争」に勝利し、最終的に権力を奪取するや一転、「脱亜入欧」（遅れたアジアを脱して文明の欧米列強の側に立つべし）を唱え始める。そしてこの「脱亜入欧」の考え方が明治欽定憲法のもと、富国強兵、アジア蔑視、植民地主義思想のベースになっていくわけである。

遡ってみると黒船来航以後、海外列強との直接的武力対決を回避し、同時に通商交易を指向しようとしていた開国派の幕臣たちを「亡国者・売国奴」とのしり、血祭りにあげるべくテロリズムに身を委ねていた攘夷派を自称するものたちが、こんどは気取って「鹿鳴館」という名の「文明開化」を謳歌し始める変節をどう理解したらいいのだろう。繰り返しになってしまいが、それまで「国学」だ「水戸学」だと言いながら、

開国などもつてのほかとばかりに、開国を急いでいた大老井伊直弼を桜田門外で殺害、強硬な姿勢で攘夷決行を幕府に迫っていた張本人たちなのだから驚く。その矛盾の印象を薄めるために井伊直弼を徹底的に悪者に仕立て上げる歴史記述が必要だったのだろう。それが「安政の大獄」である。しかし過激な攘夷派の主張通り海外列強と本格的に交戦していたなら今の日本は無かつただろう。外国嫌いの天皇の勅許（日米修好通商条約の承認）を待ってからでは遅いことを井伊直弼は命をかけて判断したのであると思う。そうしなければ植民地になっていた可能性はきわめて高いということとを井伊直弼は見通し開国を急いでいたのである。付け加えておくと攘夷派によるテロは井伊直弼の「悪」の比ではなかつた。「誅殺」「天誅」という名目で開国派の人たちとその家族、それに江戸近郊に駐在していた多数の外国人に対してさんざんことを集団でやり続けていたのだから……。

わが国近代化は開明派幕臣たちの慧眼から

しかも驚くなかれ、わが国の近代化への基盤整備の多くは江戸末期に小栗忠順ら幕臣たちの手によってすでに着手されていた。この事実も社会の教科書にはほとんど記述されて来なかつたのである。たとえば、す

でに実現もしくは構想されていた近代化への事例をいくつか挙げてみると次のような物であった。

横須賀製鉄所（造船所）建設の着手、郡県制構想（廢藩置県に利用されることになる）、兵庫商社（日本最初の株式会社）、築地ホテル（水洗トイレ付）建設、ガス灯設置の提唱、金札発行など金融経済の立て直し、日本初のフランス語学校設立等……がそれで、明治新政府は、それらのプランを模倣し、継承し、応用したに過ぎないのだが、あたかも明治新政府になってからようやく日本の近代化への歩みを始めたかのように歴史書に書き込み続けたのである。いつの時代も情報をコントロールし、さまざまな施策を恣にできるのは、一部の上層部にいる為政者に限られるようである。

〈職業人としての自分史の試み〉

要領の悪い歩行について

(部分草稿)

合いをいただき、なにかの折に感想でもお寄せいただければ幸いである。

一 彷徨うだけが青春さ

― 県に採用されるまで ―

(一) なぜ山形にきたか

ぼくは一九八二年四月に二十四歳で県の職員となり、当時、村山市楯岡にあった北村山福祉事務所に赴任した。この話は、そこから書き起こそうと思っていたが、それに先立って、県職員となるまでの事情を簡単に記しておきたい。自分がどんな心持ちで県職員としてのスタートを切ったのだったか、そのあたりを再確認するためである。

というのも、この稿を書き起こしつつ自らの過去から現在を照らし出そうとすると、やはりこのスタートの切り方が、その後の県職員としてのぼくのあり方と、さらにはこの土地に定着して生きてきた一個人としての生き方との両方を、どこか深いところで規定してしまっていたように思われるからである。

初手から乱暴に言い切ってしまうえば、県職員としてのぼくの在りようは、この県の生まれ育ちではなかったということ……やはりそのことに規定されていたのだと思わざるを得ない。

山形は、若い頃のぼくにとつては紛れもない「異郷」であり、それゆえにぼくはこの土地を「ゲゼルシャフト」と看做して、その一市民として、つまりはその地域社会を自

この文章は、いわゆる「自分史」を記すかのようにして、自己と対面するために書かれつつある記録(草稿)の一部である。

このような性格の文章を他者に向けて公表する場合、どんな文体でどんな書き方をしたら相対的に厭味の少ない文章になるか、またじぶんが書きたいことのうち何をどう伝えたら見知らぬ読者に興味をもって読んでもらえるか、それは想いのほか難しい課題である。

いや、そもそもこんな文章を書く対自的な意味は何か。今にも萎えそうな自尊感情を慰撫する以上の意味はあるのか……、ぼくは暗澹たる想いのなかで足掻いている。この草稿は、この足掻きの姿でもあると思し召して暫しお付き

【はじめに】

◎ 高橋 K 2

覚的・目的意識的に構成する一住民として生きようとしてきたように思う。つまり、このべとべとした地域でこそ、地縁や血縁の情実に頼ることなく、まさに一個人としての倫理と公共の論理で生きていかなければならないのだと、奇妙にもずいぶんと生真面目に思い込んでいたのではなかったかと思う。そしてそこには、たとえささやかであつてもこの地域社会を自治体として、つまり自立したものと創つていくために働こうという若い想い込みもあった。

とすれば、導入部であるかのようにして、そもそも秋田県出身のぼくがなぜこの山形に就職することになったか、その辺りの事情から書き起こすことが必要だと思ふ。

とりあえず、山形大学に入ることになった経緯から始めることにする。

ぼくが生まれたのは一九五七年。秋田県湯沢市の中心商店街にある零細な商店の二男として生を受け、そのまま地元の小・中学校を経て、一九七三年に地元の県立湯沢高校に進学した。

当時の湯沢高校の状況を思い起こしてみると、周囲に比較的深い郡部を抱えた佐竹南家の城下町湯沢の特長もあつて、この最後の旧制中学として創立された高校には、県立高校の統一入学試験の得点率でいうと六〇%台から九五%まで、幅広い成績の生徒が入学してくるのだった。

当時は今よりも国立大学の地位が高かつたから、進学校のレベルを国立・公立大学への進学者数で評定する傾向が強かつた。このころの湯沢高校は県内で十位内に入るかと

うかという程度だつたと思うが、国公立大への進学者数を急速に伸ばしつつあり、いわば進学校としての発展期にあつた。要するに、田舎の中学でのんびりしていたために入学時は大して成績が良くない生徒を努力させ、これを伸ばして国公立大に押し込む。そういう意味では付加価値率の高い高校だつたようである。

それ以前には、難関大学を目指す優秀な生徒は横手市の県立横手高校に進学するのが常だつたが、この頃は地元の中学教師たちに「地元高校（ひいては地元湯沢市）のステータスを上げるため、優秀な生徒は湯沢高校に。」という暗黙裡の方針があり、実際、そのことを意識した進路指導が行われていたようである。

ついでに言えば、進路指導においては、高度経済成長期の時代精神とも言うべき「資源のない日本は工業による貿易立国として生きていくほかない」というテーゼを反映して、「成績のいい生徒は国立理系」というのが言わずもがなの大方針だつた。

ぼくはといえば、横手高校出身だつた担任教師に「横手」というハンコと「湯沢」というハンコを目の前に並べられて、好きな方を書類に捺せと言われたのだったが、「生活態度がだらしないおまえに、早起きなんかできるものか！」という専制君主の父親の一言で、通学に時間がかかる横手高校ではなく、自宅から歩いて通える地元の湯沢高校を受験することになったのだった。

ぼくは2番の成績で湯沢高校に合格した。1番は中学で

多くの隣の席にいた女子生徒だったが、当時は一般に高校では男子の方が伸びると思われていたから、高校の教員たちは、当初はぼくを実質的な学年トップの生徒だと看做していたようだ。そこで、教員たちの期待を受けて二年から理系進学コースに進んだ。理系コースに進んだ理由は、『生物セミナー』などの大学生向けの雑誌を読み、当時の日本ではまだ初々しい学問領域だった生態学に関心を抱いていたからである。

だが、なにしろ勉強嫌いで、授業はサボらなかつたものの授業時間以外にはほとんど勉強というものをしなかつた。おかげで、数学、物理、化学などの授業について行けなくなり、アタマの中身も志向性もとうてい理系向きではないということを知る。

三年次からは文系進学コースに移ったのだが、模試だけはマメに受験していたものの、相変わらず受験勉強は一向にしなかつた。その当時のぼくは自然に関して夢想的であり、かつ人間関係や社会に関して空想的な青春期を過ごしていた。情況に関するロマン主義や自閉的な理想主義を抱懐していて、大学というのは受験勉強してなんかで入るものではないと思いついていた節がある。そんな横着を続けているものだから、成績は急降下を続け、受験期には学年で百番くらいになっていた。当然、ぼくに對する教師たちの見方も大きく変っていた。

ところで、ぼくが高校に入学したのは一九七三年。一年生だった時の三年生にはまだ学園紛争（高校闘争）の敗北

の記憶があり、ぼくはその燃え滓の匂いを嗅いでしまったため、あの時代に遅れてきた者として、新聞部でひたすら内向的な新聞を発行しながら捻くれた高校時代を送った。今になってみると、進学コースのクラス担任や進学指導担当の教師たちの期待をもつとも裏切る存在だったのではないかと思う。

受験期が近づくと流石にいまの実力ではろくな大学に行けないと思うようになったが、浪人して受験勉強すればそれなりの大学に入れるさとタカをくくり、来年度の本番に向けた予行練習だと自分に言い聞かせ、法学部を目指して国立一期の北海道大学（思春期に札幌の親類のもとを訪れ様々な経験をしていたので、北海道に憧れていた）、私立では早稲田大学を受験した。というか、それ以外の大学を受験しなかつた。当然どちらも不合格だったが、浪人すれば合格は無理ではないという根拠の定かでない感触を得て家に帰ってきたのだった。

ところが、間もなく担任教諭に呼び出され、「おまえ、もうちょっと合格の可能性がある大学も受験しろよ。国立二期校の願書提出にはまだ間に合うから。」と薦められたのが山形大学人文学部だった。ぼくは、そうか、自分も「国立大合格者〇〇名」という高校の成績に貢献しなくちゃならないのだな……という想いを漠然と抱き、あるいは母親の哀願に應えるため（であるかのようにして）まるで人形のように無表情で願書を書いた。

ただし、それでもこの大学にしたのには若干の理由があ

る。当時は、文部省の大学政策はまだまだ保守的かつ權威的で、国立大学の法学部は旧帝大にしき設置せず、新制大学は一期校でさえ「法文学部」とか「人文学部法律学科」とかいう状態だった。まして二期校となれば「法律学科」さえ認められず、法律を学びたい学生は「人文学部経済学科」の「法律コース」に進むしかなかった。しかも、そんなコースを持つ二期校は、西日本の鹿児島、中日本の静岡、そして東日本の山形、全国にこの3つしかなかったのである。

受験当日になっても高校数学の公式をたっただ一つしか覚えていないほくのような受験生が合格するとは思っていなかった。たとえ合格してもこの大学には入学しないつもりでいた。だが、受験してみると数学で公式を必要としないアルゴリズムの問題が出て、これがすらすらと解けたために、このままでは合格してしまうと焦った。生まれてはじめて精神的な葛藤で激しい下痢をし、試験の途中でトイレに駆け込んだ。

だがしかし、合格通知が来てしまった。そして、母から、なんとか入学して欲しいと哀願された。母には合格が不確実な浪人期間の一年が待てないのだった。いや、それは哀願というよりもむしろ激しい感情の吐露だった。

このとき、母はすでに五十七歳、父は六十五歳。ほくの母は後妻として零細な商家に嫁ぎ、厳しい姑の下で身を粉にして働いて家業を盛り立て、三十九歳で生涯ただ一人の子となったほくを生んだのだった。彼女は、自身も父も高齢だから、あとどれくらい家業を背負えるか不安だったに

違いない。やがて家業の主役は、彼女にとつては先妻の子である私の兄と兄嫁に移る。父が亡くなれば、自分の息子の学費を負担させるのは申し訳ないと感じていたはずである。ほくと二十歳も違う兄は、生まれてすぐに実の母親を病気で亡くし、親戚の乳母に預けられて育った。中学を卒業すると東京の商店に丁稚奉公に行き、年季が明けると実家に戻って嫁をもらった。そして、ほくが高校生するときにはすでに小学生と幼稚園児の子どもがいた。

さらには、母は息子が一流大学に入学して都会へ出れば、もはや故郷に帰って来ないと覚っていたのだらう。彼女にとつての切ない希望は、ひとり息子が地元で教員にでもなり、夫亡き後の自分の老後を、家の跡取りである生さぬ仲の前妻の子に負うことなく過ごすことができるようになることだった。ほくは、思春期以降そのことをひしひしと感じていた。だからほくは母に抗えなかった。母は合格が不確実な浪人期間の一年が待てないのだと分かっていた。実際、この四年後に、母は死病となる胃がんを患うことになる。

こうして、ほくは自分の入学する大学に希望をもてないまま山形にやってきた。

最初の半年ほどは、図らずも二期校に入学してしまった者の多くがそう試みたように、大学に通いながら再度大学受験を目指して受験勉強をしようとして足掻いた。

そのうえ、大学の雰囲気はどんよりと澁んでいた。学生たちが社会的な問題に恐ろしく無関心であることに失望し、キャンパスライフは、まるで息苦しい高校生活の延長のよ

うに思われた。

大学入学当時のぼくには、自分がいっばしの能力を身に付けて、社会を変えるために貢献しなければならぬという思い込みがあった。ピートルズの「ヘイ・ジュード」みたいに、観念的には自分の肩に世界を背負っていたのである。なぜそんな観念を抱いていたかについてはここでは詳しく述べないが、ぼくが育った昭和三十年代における小さな城下町の古い社会関係、小学校高学年で担任教師から叩き込まれた使命感、そして「団塊の世代」（全共闘世代）に憧れて育った七〇年代の時代性などが、理由といえはその理由である。

だから大学は、たとえそれが「二期校」であったとしても、「自己変革」の場所だと想っていた。けれど実態はあまりに澱んでいた。「こんなところに居たら、ぼくの未来は閉ざされてしまう……」そんな閉塞感と焦りが襲ってくる。なにも打開できない自分に激しく苛立ち、十八歳のぼくは、深く深く五月病を病んだ。

(二) 山形での学生生活

挫折感を抱いて山形大学に入学した者は、身の回りに何人もいた。そういう者は、最初の数ヶ月間、大学に通いながら再度大学受験を目指して受験勉強をしようと足掻く。だが、大学の教養部の授業はびっしりと組まれており、とくに週に6コマから8コマある外国語と第二外国語の授業

の予習の負担は軽くなかった。

心ならずして二期校に入学した者の多くが、夏休み明けまでに大学の単位取得と受験勉強との両立に挫折し、大学を休んで再度受験に挑むか、それともこのままこの大学を卒業するかを選択を強いられることになる。多くは再受験を諦め後者の道を歩いていくのだが、ぼくもまたそうだった。「挫折」して流れに身を任せたくは、しかし、やがて精神的に大きな自己変革を経験することになる。そのきっかけは、ひよんなことから演劇研究会に入部したことだった。たまたま部室の前を通りかかった際に女子部員の明るい笑い声が漏れてきたので、ふらりと覗いた劇研の部室。そこで知り合った先輩たち、とくに個性豊かな女の先輩たちに触れて、ぼくの苦しみは徐々に癒されていった。そして、やがてそこで関わった男の先輩を通じて、アンダーグラウンド演劇を入口に文学や思想の世界に触れ、自分の価値観が一八〇度転換するような精神的経験をした。

それまでぼくを縛っていた「世の中はこうならなければならない」とか、「自分はそのために一定の役割を果たさなければならぬ」とか、「役割を果たせる人間になるために、それなりのポストに就かなければならない」とかいう観念から、ぼくは少しずつ自由になっていった。文学や哲学や思想関係の書籍を乱読し、戯曲を書き、演出し、役者をやり、そして僅かながら大学の外の大人たちとも知り合って、それぞれに影響を受けた。こうして、あつという間に学生時代が過ぎ去っていった。

それから、学部で三年生でいちばん尖がっていた時期、劇研で自作の脚本による公演を主宰した際に、かなり厳しいほどの演出に最後まで必死についてきた教育学部の一年生と、やがて恋に落ちた。そして、五年間付き合ひ、その女と結婚することになる。ぼくが山形で人生を送ることになった一番の理由は、この女が家付きの一人っ子だったことにある。

ところで、大学の講義には真面目に通っていたが、演劇や文学にかまけて就職のことなどまったく考えずに大学四年生になったその夏休みの終わりに、ぼくは突然大学院への進学を決意する。

単位取得の成績は学科でトップクラスだったようで、学部の学生係から「就職するなら、かなりいいところに推薦できるよ」と声をかけてもらっていた。当時、全国の文系学生の人気ナンバーワンは「東京海上火災」だったが、山大的人文学部でもこの会社にかろうじて推薦枠をもっていたようである。時代はイラン革命（一九七九年）による第二次オイルショックの直前で、まだ景気の良い時期だった。けれど、ぼくは、他人の金儲けのために働かされるなんて真っ平御免だ^〴と思っていたので、民間企業への就職など一顧だにしなかった。もしあのとき、民間企業の大卒の初任給が十万円そこそこの時代に「新規採用者の六月のボーナスが百万円」と言われていた東京海上火災のような一流会社に就職していたら……と思うと妙な気持ちになるが、ぼくなどは、バブル崩壊後あつという間にリストラされた

に違いないと思う。

ところで、専攻としては、人文学部の経済学科の法学専攻コースで、卒業に必要な法学や経済学の講義と合わせて文学科の講義や就職関係の講義も受講するという大風呂敷を広げつつ、ゼミは「日本政治思想史」という極めてマイナーな分野を選択していた。

恩師といふべきゼミの担当教官に進学先と受験のための勉強の相談をすると、彼は「まず論文を書きなさい。論文を書くとその勢いで専門学科や外国語の勉強も進むから。」と、今から考えれば随分精神的なことを言う。ぼくは、とにかく受験用の勉強（とくに外国語の専門書を読む勉強）をする必要があるのに……と思いつつも、仕方なく卒業課題としては必須でなかった論文執筆に取り掛かったのだった。

テーマはというと、日本政治思想史、とくに明治期の帝國議会開設後の思想状況に関心があったことと、大学院入学後のことを考え、漢文読み下し文・旧仮名遣い文に慣れるため、そして山形に関係のある人物ということで高山樗牛を題材にすることとし、その思想の変遷を辿りつつ彼の思想を時代思潮に位置付けるということに定めた。もっとも、実のところを言えば、当該教官の研究室の書棚に、大文学図書館蔵の樗牛全集の何巻かが並んでいたからという極めて安易な選択だった。

山形県庄内地方出身の樗牛は、一般には『瀧口入道』という小説の作者として知られているが、宗教を否定し、神

道（樗牛によれば神道は宗教ではない）に立脚した「日本主義」を唱えて、明治三〇年代においてすでに、西洋文明と東洋文明（その盟主たる日本）の最終的な決着をかけた衝突が起こるとする、後年の石原莞爾「最終戦争論」の魁となるような過激な論陣を張っていた。その一方で、どのような人間でも日々の生活それ自体を「美的生活」として生きることにこそ至上の価値があると主張していた。

若き樗牛には、エリート学者として夏目漱石らと同じ時期に西洋へ国費留学すること、そして帰国後には帝大の教授の座に就くことが約束されていたと言われるが、留学前に肺病が見つかって留学は取りやめとなり、大きな挫折を経験することになる。東京帝大の美学講師を務めつつ、雑誌『太陽』で自己の主張を展開し、結核が悪化すると日蓮に傾倒。三十代でこの世を去った。

樗牛を読み始めてすぐに、思想家論をやるためにはこちら側に方法論がなければだめだと痛感した。樗牛と明治三〇年代の思想状況についての論文は、その具体論に入る以前に、思想家論の方法を求めて迷宮に入り込んでしまった。論文の構想は長大になり、結局は思想家論に関する方法論的模索と、その題材として樗牛を取り上げる問題意識を述べ、樗牛の言説に少し触れたところまでの中間報告として提出せざるを得なかった。

こんなことをしているものだから、大学院受験のための勉強、とりわけほとんど手をつけていなかった第二外国語（独逸語）の力は散々な状態のままだった。

ひさんな準備状態で受験したのは、またもや北大だった。もっとも、この頃はすでに北海道に対する憧れは色褪せていて、北大を受験したのは、極めてマイナーな「日本思想史」の分野を専門とする教授がその法学部に所属していたからだった。

案の定、独逸語の試験結果はひどいものだった。ニーチエは読んだことがあったが、読解が容易でないといわれているマックス・ヴェーバー（試験の最中は誰の文章かわからなかった）に歯が立つ訳がなかった。

このとき、不合格は今の実力からみて当然だし、この経験を来年の受験に活かせばいいくらいの想いでいたが、試験とは別に一生忘れられないほど恥ずかしい想いをするようになった。

当時の国立大の法学部の大学院では、院生を入学させるということとは、その学生の専攻を指導する教官が、自分の弟子を取る」ということと同義だった。だから、特定の教官に弟子にしてもらうためには、学力の他に学問の志向性と人間性の両方の相性がよくなければならぬ。国立大学の教官は、採用した院生についてまさしく弟子として育て、その就職（つまり大学などの研究者になること）にも意を尽くすのが一般的だった。

山大の恩師は学生想いの方で、不合格の結果が出た後、再度受験するときのためにと、北大の教授に依頼して個別面談の機会をつくってくれたのである。（合格発表は受験から2日後だったから、ぼくはそのまま札幌に滞在していた。）

その教授の研究室を訪ねたときの様子は今でも脳裏に刻まれている。「近代日本思想史のなかで君がもつとも評価する人物は？」と問われ、「北村透谷です。」と答えたのだが、ぼくが述べたその理由について教授はほとんど受容できない様子だった。そして「他にはどんな人のどんな著作を読みましたか？」と訪ねた。

それに対して、ぼくは直接読んでいない著者や著作についても読んだかのような口ぶりをして、すぐに化けの皮をはがされた。それまでのぼくの知識や思考などいい加減なもので、シビアナ議論にはまったく通用しない。それを口先で誤魔化そうとした自分が恥ずかしくて惨めで、今までのじぶんは何だったんだ……と思い詰め、寸でのところでの帰りの青函連絡船から厳冬の津軽海峡に身を投げるところだった。

(三) 静岡へ行き、山形に戻る

愚かさを痛感したぼくは、翌年大学院に再挑戦したい、ついでに山大に1年留年させてほしいと担当教官に申し出た。すると彼は、この大学にいてもこれ以上政治学を指導できる教官はいないから、静岡大学人文学部の「専攻科」に行けと言った。同学部にはこの教官の恩師が勤めており、さらに政治学関係の教官が何人かいる、だから大学院受験のためにはその方が勉強になるし、「専攻科」は1年課程だが、学校教育法に定められた正規の課程なので留

年と違って学歴として認められる、それに高校教員の1級免許が取得できる……これらがそこを勧める理由だった。当時の大学の「専攻科」は、「大学院」を創ろうとする大学が、学部を卒業してもさらにこれだけ専門教育を受けたい学生がいるという口実づくりのために設置しているのが実態のようだったが、是非もなく、ぼくはそこを受験し、翌年4月から静岡大学の学生になった。

静岡での1年をどのように過ごしたかについては別の機会に書いたもので、ここでは文脈上必要最小限の記述とする。静岡には大学院受験の準備のために来たのだと。自分に言い聞かせて毎日を送った。そして1年で必ず静岡を出る決意だった。そこで講義は卒業に必要な最低限の単位数しか受講せず、毎晩明け方まで自室で受験準備をし、昼前に起きて大学に行き、学食で朝昼兼用の定食を食べ、それから授業以外は図書館で勉強するという生活だった。1週間、ゼミの時間を除けば誰とも口をきかない日々が続いた。

静大の担当教官とは、彼が年配だったこと、東京住まいで東京の中央大学でも講義とゼミを持っていたことなどから、山大の恩師のように日常的に個人的な会話をする機会を持つことができなかつた。彼は、君はどこを受けるつもりだ？などと向こうから声をかけてくれる人でもなかつた。だから、専攻分野や大学院受験に関する情報を、教官や学生たちから得る機会を持てなかつたのである。

当時、ぼくの関心は国家論・国家思想にあった。その分野を専攻している教官がいる大学で、ぼくの実力で受かる

可能性がありそうな国立大学は名古屋大学くらいだった。名大法学部は外国語の試験が英語だけだったのである。しかし、その教官とはどうも学問の相性が合いそうになかった。どこを受験するか悩んでいるうちに、あつという間に秋がやってきた。

ぼくは名大受験を諦め、とにかく東京に出なければダメだという想いのもとで在京の私立を受験することにした。そして、たしか十月ころ、上京して政治学科のある早稲田、慶応、明治、法政の各大学を訪ね、募集要領を手に入れることにした。国立の院生は「弟子」だから合格しても1、2名というところだったが、私立は弟子ではなくあくまで「大学院の学生」という位置づけで、就職の面倒など看てやらないかわり合格ラインに達したものは受け入れるという姿勢だったから、国立に比べて入りやすかったのである。

しかし、このとき各大学の窓口を訪れて愕然とすることになった。各大学の窓口で「今年の募集要項の請求ですか?・・もう締め切っています。来年受験のためかな。」とか、「今ごろ来てもダメだよ。今年の試験は明日だよ。」などという返答が返ってきたのである。

実は、この年から大学院入試の時期が、それまでの二月から十月ころに前倒しされていた。インターネットがある時代ではない。ぼくは誰とも口をきかない生活をしてきたため、そのことを知らなかったのである。

この決定的な失敗のほかに、この時期、もうひとつぼくの人生を決定的に左右する出来事が起こっていた。

静岡に移り住んで間もない五月、湯沢の母が胃の手術を受けることになった。手術に合わせてぼくは帰省したが、家族は誰一人医師からそれが進行がんの手術だと説明を受けていなかったのである。一九八〇年、まだまだ癌は不治の病であったから、それを本人に宣告することは今ほど一般的ではなかった。そのうえ、このときは病院側の手違いで家族にもそのことは伝えられておらず、医師が母本人に「胃潰瘍」の手術だと説明したことを家族一同も信じていたのである。

手術後、医師は摘出した臓器を示しながら、それが胃がんであることを説明し、リンパ節は取れるだけ取ったと語った。その展開された胃袋には、鶏卵ほどの大きさの高分化型のがん細胞が突き刺さっていた。医学の門外漢である自分にもすぐにそれがかなりの進行がんだとわかった。そして、その母の胃袋に突き刺さった悪性新生物こそがぼくの我欲に違いないと思った。……ぼくは母を侵食して成長しているのだと。

ふつくらししていた母は見違えるほど痩せ、やがて日常生活に復帰した。ぼくには、母に残された時間は少ないという確信があった。これ以上母に心配はかけられないと思うと、このまま静岡に留まって、来年度さらに大学院を目指すという選択はすでにありえなかった。

大学院を「受験すること」に失敗したと女に告げると、当時学部の三年生だった彼女は、あなたが来年大学院に合格したとしてもそのあと大学院に何年入るのか……、わた

しはそんなに待てないと言って、二人で落ち合った新宿歌舞伎町の連れ込みホテルで声を上げて泣いた。女との付き合いはもう三十五年になるが、このひとがこんな風に女らしい理由で泣くのを見たのはこの一度だけである。

湯沢に帰って母を安心させるか、山形に帰って女との結婚に向けて職を探すか、あるいは知的な刺激を求めて東京に出て一人で暮らしていくか、その選択に悩んだ。

ところで、この1年の間に、景気つまり就職を巡る状況は大きく変わっていた。七九年のイラン革命によるイランとアメリカとの関係悪化は、第二次オイルショックとなつて世界を、とりわけ中東の石油に依存している日本を襲つた。遠い砂漠の国の革命が、日本の大学生の就職を困難なものにする……まさにグローバルな時代が来ていた。

突然に降ってきた不況で、大学新卒の求人は急激に減少していた。求人広告を見ると高卒者の募集はあるが、大卒者の募集はごく僅かだった。しかもこのとき、ぼくは新卒者のリクルートの時期に完全に乗り遅れていた。それ以前に静岡で山形の就職口が見つかるわけもなかった。

こうして、ぼくは、山形に帰って公務員試験を目指すという道を選択した。そして、先行きの見えない不安にとりつかれながら、生活リズムと精神の安定を図るために、一九八一年四月から山形大学人文学部に出戻りして聴講生となった。

(四) 国家公務員試験に落ち、山形県職員試験に受かる

2年ぶりに山形大学に出戻って、日本政治思想史を専門とする恩師を訪ねると、彼は以前と変わりなくぼくを遇してくれ、自分のゼミの聴講生になることを快く受け入れてくれた。しかし、ゼミの学生たちの雰囲気は2年前とは一変していた。以前は所属する学生が四・五人だった政治学ゼミは、いまや二十人近いゼミ生を抱えていた。恩師は地元テレビ局への出演などで有名になっていたし、政治学ゼミに所属すると公務員試験に有利だという評判が立っただけじゃなかった。

ゼミで取り上げるテーマやテキストも随分様変わりし、学生たちの意識も考え方もドライで保守的なものになっていた。ゼミのテーマが退屈で学生との知識の違いも大きかったことから、議論するのが苦痛になり、一、二回出席した後はまったく顔を出さなくなった。

じつは、政治学ゼミと同時にもうひとつのゼミに聴講を申し込んでいた。それは経済原論ゼミで、やっていることはマルクスの『資本論』を丁寧に進んでいくという、一見するとまったく面白くない内容だった。所属学生は四年生男子がふたりだけ。担当教授とぼくを入れてたった四人の読書会のようなゼミで、天気がいいと馬見ヶ崎川の川原など野外に出かけて和気藹々と座をつくった。桜の季節には花見をしながらのゼミだったし、温泉に行くこともあった。この時期のぼくは、このゼミとこの担当教授には

んとうに癒された。そして、初めてまともに向き合った『資本論』第一巻第一章の内容（いわゆる価値形態論）に震撼するというような経験もした。

この先生については、いつか別のところで詳しく書いたかと思っている。先生とは二十五歳以上年齢が離れていたが、このあと彼が滋賀大学に移り、さらには国立大学を定年退官して私学短大に再就職し、やがてその学長になり、その短大も退職して奈良県で年金生活に入った現在まで、足掛け三十年に亘って友人同士のような付き合いをしていただいている。

さて、公務員試験の話に戻る。3月の下旬に山形に戻ってから試験準備の勉強に打ち込んだが、たしか6月ころの公務員試験に向けて実質三ヶ月ほどしか時間が残されていなかった。当然、国家公務員上級のいわゆるキャリア組の試験はスルーし、山形県職員をメインの目標にして、これと国家公務員の労働基準監督官、そして国家公務員中級の採用試験を受けることにした。日中は山大の図書館で勉強したが、当時の山大図書館には冷房がないばかりか照明もずいぶん暗く、生まれて初めて必死になって勉強したばかりは、さらに視力を落とすことになった。

いちばん時期が早かったのは労働基準監督官試験だった。一次試験はたしか仙台だったと思うが、二次試験を東京の労働基準監督署で受けたのは忘れられない思い出である。（もっとも、その監督署の場所については覚えていない。たぶん飯田橋あたりではなかったかと思う。）

論述試験と面接試験が終わった後、健康診断受診のために、東京駅八重洲口の八重洲ブックセンターの向かい通りにあった国労会館の中の診療所までかなり歩かされた。国家公務員の採用試験で国鉄労働組合の診療所を使うのかと驚いたが、これは八一年のこと。このあと「戦後政治の総決算」を掲げた自民党中曽根政権による苛烈な国労弾圧が始まるのだが、まさにその直前の「旧き良き時代」の最後の風景だった。

ところで、当時、労働基準監督官になるには、視力が裸眼片目で一・〇以上、矯正なら一・五以上なければならなかった。ぼくは眼鏡ではどうしてもこれだけの視力を得ることができず、止むに止まれずコンタクトレンズを新調して望み、なんとか視力検査をクリアした。二次試験受験者には上京するための交通費が支給されていたので、健康診断で問題がなければまず全員を合格させるのが常のようだった。二次試験の受験者は五十名弱だったと思う。その中でほとんどもう一人が落とされた。ぼくには自分がなぜ落とされたか、その理由がはつきりと解った。面接で失敗したのである。

面接に当たって、事前に質問事項の書かれた用紙が配られていた。その中に「今いちばん関心のある社会的な出来事は何か」という項目があり、ぼくはそこに「行政改革」と記載していたのだった。

当時は大学が就職試験の面接の指導をすることなどなかった。今だから分かるのだが、ここでぼくが受けた面接

はいわゆる「圧迫面接」だったのだ。ぼくが行革をあげたのは極めて単純な理由で、直前に新聞で「行革で一番先に減らされることになったのは労働基準監督官」という趣旨の記事を読んでいたからだ。面接官にはそのことを話したが、彼らはそんな単純な理由では許してくれなかった。彼らは「きみは『小さな政府』に賛成か反対か」と何度も迫ってきた。ぼくは「小さな政府」としても、この時代、アダム・スミス流の自由主義でやっていけるわけではないと思います。」と応えた。すると面接官は「じゃあ、きみは『大きな政府』論者なのですね。」と決めつけた。

ぼくは御目出度い田舎学生で、中央官庁の採用担当者がこのような方法で受験者の思想を篩いにかけてることなど想いもよらず、安易な回答をして相手に格好の追及の材料を与えてしまったのだ。労働基準監督官採用試験の受験者には労働者の権利と福祉を護りたいと思って受験している者がいる。そのなかには「大きな政府」の必要性を感じている者、つまりは中曽根政権・自民党政権にとつて都合の悪い思想の持ち主がいる可能性が大きい。彼らは、公務員試験受験者の思想傾向を十分チェックして可否の判断をしようとしたのだ。いや、そもそも行政改革について議論をするような人間を官のなかに入れたくなかったのだろう。ぼくが中曽根政権の行革とその反対勢力弾圧にかけられ本気度を認識することができていれば、こんな結果を避けたかもしれない。

しかし、ぼくはまた同じような失敗を国家公務員の中級

試験でも犯してしまった。こちらの面接は仙台で受けたのだったが、面接終了後の説明で、面接官とは別の係官から「あなたは成績がよかったから、まもなくいくつかの官庁から採用の打診があるでしょうが、希望の官庁があれば自分から積極的に働きかけてください。」と言われて、すでに合格したような気になっていたのだが、じつは面接でこんなやり取りがあったのだ。

面接官が「あなたは学歴や試験の成績からみて、キャリア試験を受けてもおかしくなかった。なぜ受験しなかったのか。」と問うので、ぼくは「受験準備の時間がなく、キャリア試験に合格するのは無理だと思いました。」と正直に応えたのだが、面接官はそんなことで許してはくれない。「あなたなら受かるかもしれない。今後受験する気はないのか。」としつこく問う。そこでぼくは愚かにも「今は合格したら中級の国家公務員になりたいと思います。もしどうしても上に行かないと自分の考えたことができないとしたら、そのときは考えるかもしれません。」というような趣旨のことをしゃべってしまったのである。

労働基準監督官試験の失敗に懲りて、政治的・思想的な話題には触れないように気をつけていたが、これこそがまさに受験者の思想をリトマス試験紙にかけるような質問だったことに、今なら気づく。つまり、国家公務員の世界では、キャリア組とそうでない者には決定的な身分の格差があり、キャリア組は「考えて命じる者」、中級・初級公務員は「その命に従って業務を遂行する者」という強固な枠組

みがある。だから、この組織の枠組みに収まらない考えの持ち主（キャリア組に異議を唱える可能性のある者）を見つげ出し、予め排除しておくことが重要なのであろう。それとも、それまでに実施された中央官庁の試験の面接結果についての情報が、ブラックリストとして東北管内の国家公務員中級採用試験の事務局にも通知されていたというかどうか。

ついでに山形県職員採用試験の面接についても記述しておくと、結果的に合格したとはいえ、このときの面接も痛い記憶である。

ぼくは先に述べた女と暮らすため、この山形県になんとか就職したいと思っていた。ところが出身は秋田県である。県の面接官は、なぜ秋田県ではなく山形県を受験したのかと追及した。ぼくは「山形大学に来て、山形が好きになりました。」などと答えるが、相手は納得しない。なにしろこの年の応募倍率は二十倍を超えていた。他県出身者の入る隙間などありそうにない。そこでやむを得ず、「こちらに結婚したい女性がいます」と答えた。すると面接官はこの回答の真偽を探るかのように、どういう女性かを尋ねてきた。そこで忸怩たる想いをしながら、「大学で知り合った地元のひとつで、一人っ子です。」と答えると、面接官はやっと納得したような顔を浮かべたのだった。それはほんとうのことだったが、そこまでプライベートを披瀝させられた（つまりは合格したくて披瀝してしまった）という屈辱的な思いが未だに忘れられない。

もうひとつ、山形県の一次試験に合格したあと受験した郷里の湯沢市役所の採用試験についての記憶も記しておく。筆記試験をパスして最終面接に残ったのは、ぼくのほかに二人だった。うち一人については中学・高校の同期生で顔と名前を知っていた。彼は市役所の臨時職員をしていた。もうひとりとは知らない人物だったが、相手の方が中学生徒会長だったぼくを先輩として知っていた。ようするに小さな街なのだ。

ここの市議会で長く議長を務めていた人物は、母の遠縁に当たる親戚だということ、ぼくも子どものころから何度もお宅を訪問していたのだが、母は面接を受けに行く朝、ぼくに囁くようにこう言った。

「山形県に就職したいんでしょう？ 市役所の方は誰にも頼まないからね。」

それは、議長を通じて市役所にコネがあるがそのコネを使わなかったという意味である。もっと言えば、この市役所に入るにはコネを使わなければならないが、おまえはコネを使われていないから間違ひなく落とされる。それでいいね、という念押しだった。

この囁きを聞いたときの心の震えは、いまも生々しく蘇える。母はぼくに落とされる覚悟をするようにと話すことを通じて、じつは息子を手元におくことを諦めるのだと自分自身に言い聞かせたのである。

その二人は採用され、ぼくだけが落とされた。ぼくが最終的に合格した採用試験は、結局山形県職員だけだった。

「いろどり」の人たち

（上勝町訪問記）

◎ 佐藤藤三郎

「葉っぱの町」として知られ、株式会社「いろどり」が高齢者たちの生活を引き立てている徳島県の上勝町を訪ねた。「棚田サミットと棚田活用セミナー」が行なわれるので、それに出席するためでもあるが、それ以上には天童市高橋で果物の生産に特異なやり方で励むとともに、地域の文化おこしに懸命な佐藤善博さんが「狸森よりもっと山の傾斜が険しく、急坂な耕地にあって、さらにそこに通う農道がきわめて狭い、そうした上勝町で高齢者たちが木の葉っぱを売って生き生きと生活している。その元気な人たちの姿と村の状態をぜひ見て来てはいかがか、とすすめてくれたので妻と二人で出かけた。

愛媛の松山に娘がいるのでひとまずそこに立ち寄り、娘の住んでいるマンションと道後温泉の旅館に一泊ずつし、正岡子規の記念館、さらには松山城などを見て、

急行バスに二時間程揺られて徳島に着いた。

徳島駅前から上勝町までは上勝町の旅行会社の車が迎えに来てくれており、それに乗車。約一時間で上勝町に着く。

募集要項には徳島空港からバスが発ち客を乗せるが駅前でも参加者を乗せて上勝町に向かう、という事になっていたのだが二十四日に始まるサミットに申し込んだのは私と女房の二人だけのようだったのでバスではなしに迎えに来てくれたのは小さな乗用車だった。

上勝町は人口二千人といった小さな町でありながら旅の客を扱う会社がある。そのことについてもここでちょっと触れておきたい。

上勝町は中部山溪県立自然公園となっている高丸山の東に面したところにある。その地質は山の勾配の激しさからみて地中はほとんど岩石であろうとの印象を受ける。なのにそれらの多くの山々に杉が植林されていた。それを見ながらこの杉の木はいったいどれくらい根を深く張っているのだろうかと思われた。東北の積雪地帯であれば深く根が張れない土地の杉の木はある程度育つと葉や枝に雪がかぶり、その重さで根こそぎに倒れてしまうからである。だが、そのような形跡は全くみられない。そんな思いをしたあとで温泉宿や廃校になつてる校舎の板張りをみるとやっぱり木目がすごくあらい。周知のように「銘木」と言われる秋田杉などは冬、雪に埋もれて成長が遅れるので木目が細

かいが積雪の少ない四国の杉の木たちは冬期も休まずに成長することがいち目瞭然なのである。そして木材の輸入が少ない時代に国策としてこうした山々にまで植林をすすめたことがよく知らされる。

しかしその杉の木に今は買手がつかないので困っている、といって嘆くのは全く私の村と変わりなかつた。しかも若者の都市への流出によって過疎状態になつてゐるためにそれらの杉の林の手入れがなされてゐないことも私の目に痛く感じた。

「いろどり」という写真集には上勝町は徳島県では日本では十一番高齢化率が高い町と記されているが、そのことを誇つてゐるのではなくて「にもかかわらず元気な町」と続かせたいのだろうと私はその文章を読み取つた。

しかし、同じく山村にゐるものとしては、その元氣さもかなり厳しくむずかしい状態で、大きな課題である事がふつと感ぜられる。

とはいえ「いろどり」という会社を起こし、そこにゐる人が目を向けなかつた木の葉を高齢者たちの手と知恵を活用して商品化した横石知二という人の力には「敬服」という一語につきる。氏からはその開発の経過の苦心談を一時間ほど拝聴したが、並々ならぬ術と努力である事が強烈に伝わつてきた。まず第一の苦労は「木の葉」を使つてくれる人や店を探して「街」の

料亭や割烹などをこまめに歩き回つたことだ。

日本の西南地方の大会といえれば大阪である。しかも大阪は「食いだおれ」といわれるように、食へのこだわりが強いところだ。その大阪の街を主に東京にも足を伸ばして歩き回つた、という。つまり運動というものはそうしたこまめに歩き回ることが大切なのだというものに学ばされた。すなわち「たゆみない努力」の積み重ねがこうした成果をつくる、ということである。

「棚田」のサミットとセミナーの両方が当地上勝町で行なわれたのだが、「いろどり」の横石さんはセミナーでは講師になつてゐるが、サミットでは講師にもパネリストにもなつておられない。その理由はわからないが、とにかく私は棚田の事よりも「葉っぱ」のことを聞き知りたいとの思いが強かつたのでセミナーの方に参加した。

棚田のサミットの内容について云々するのはさておき、棚田のある地域で、しかも高齢者たちがどうすれば生き続けられるか、それが私自身のテーマであり、私の住む地域の課題である。そしてそのことについて私は横石さんに学びたかつたのだ。

棚田学会や、棚田連絡協議会といった棚田を守るために努力し、頑張つてゐる人たちに対して私は批判などする余地などは全然ない。それぞれの立場からその保全のために力を尽くしていることにはそれなりに効果があると思えるからだ。だがしかし、その「それぞ

れ」といったものに現地で生きている者にとってはどこか物足りなさを感じられる。その物足りなさを実践的に埋め尽くす活動をしているのは横石さんの営む「いろどり」だと考えた。繰り返しといえば「棚田」のことを論じ、保全のために活動しておられる人の視点は現地での「生活者」自らではないということだ。さらにいえばそこに住む人たちの経済と直接的に結びついていない、といったことだ。もちろんさまざまな各面からの活動があつてこそ「保全」ができ、力となると思うからあらゆる活動を肯定するが、それでも直接的に棚田のある山里に住む人たちを支え、後押しする実践をしている例に力が足りない。したがって私はその実践の活動者に学びたい、との思いで上勝へ出向いたのである。

私はそうした意味のことを横石さんに言った。すると氏は「全く同じ意見です」と答えられた。しかし同意をされたものの、横石さんのような実践を持たない私にはそれが恥じらいを吐き出したみたいな気になつて自信を持つ、ではなくてむしろ身が縮む思いがした。季節は十月の下旬、秋の真つ直中である。私たちを担当してくれている会社の若者は私と妻の二人だけにもかかわらず小型の車で町のあちこちを廻つて見せてくれた。が車窓からは私の村と変わりなく人の姿は少ししかみられない。小さな畑にはビニールハウスがあちこちに見あつたがその中で作業をしている人も少な

い。お会い出来た農家の方はたった一人だけだった。ハウスの中に植えられていたのは、「葉わさび」、これは私の村にも野生している。あまり日差しが強くない北向きの湿り気のある肥沃な土壌に育つ植物だ。したがつてそのビニールハウスは日が強く差さない川沿いの畑、しかも黒い網のような幕を張つて植えていた。この植物は根でもつてだけ繁殖するものとはかり思っていたが、そのハウスには、移植したものと種を播いてようやく芽を出し始めているものとが並んで育てられていた。

葉わさびは私の村ではふきのとうやごみに続いて残雪があるうちに生える。それを細かく刻んで油揚げや糸こんにゃく、椎茸等々でつくったタレで味付け、広口瓶などに漬ければ次の日には食べられるというのが通常である。が、四国の上勝では、これの葉っぱを焼きおにぎりに張つて食べるとのことだ。それを聞き私は即座に「旨いだらうなあ」と思い、明春には早速やつてみようと思つた。しかし、上勝で栽培されている葉わさびは私の村に生えているものよりも土地がらなのか環境の違いがあるからか葉の形が大きい。そして主たる活用は根や茎ではなくて葉であるとのことだ。私たちはもちろん葉も茎と一緒に刻むが、根の一部を摺つて混ぜ合わせることによつて葉わさび特有の辛みと香り、味も出ておいしいのだ。妻はそのことをハウスの中でわさびの手入れをしていた中年の女性に語ると、

その女性は真剣な眼差しで、妻のその語らいを聞いていた。それをみていると多分そのようなことをやったことがないらしい。

「いろどり」という本をみると上勝に生え、育っているありとあらゆる木の葉や草が商品化されている。だが、十月下旬のその季節には、目立つものといえれば南天ぐらいなもので、集荷されている物がほかに見られなかった。

そもそも一日や二日くらいの滞在で全部を知ろうというのは無理なことだ。が、しかし有名な「いろどりの町」と全国に知れわたっているところといえども難問をかかえていることは隠しきれない様に私の目には映った。上り坂の好景気のころは大阪にも東京にも「葉っぱ」は売れた。が、近年の不況の来襲でその売れ行きもダウンしている。説明の中ではそんなことを口には出さなかったが私の「そのようになってはいませんか」との問いの答は洪かった。しかし横石知二さんはそんな弱音を吐かないことがたのもしい。そして新しい開発にスタッフの人たちと懸命に取り組んでいその姿には学ばされる。

妻と私は温泉宿ではなしに廃校になった校舎を使った宿泊所に泊まることを希望した。そのの様子を知りたかったからである。その学校は以前旭小学校といていたもので上勝町役場からはさほど離れてはいない

が、町の中心部の学校と統合されたとのことである。校舎は木造であり古くない。それに手を入れて「山の楽校」と名づけ「自然の宿あさひ」とも呼んでいる。六室あって五十人が泊まれるとのこと。そして森の中に入った農の体験が出来るらしいのだが、私たちが宿泊をお願いしたときにはほかには誰もいなかった。春はどうだとか、夏は、なども聞きただしてみたかったが、私の勘でみれば、思いのほどに利用者がいないような気がして、詳しく問い質すことを遠慮した。食事造りをするおばさんが一人。この方は近くに住んでいるとのこと、スタッフ室、と書かれた室には若い男の人が一人いた。しかしその人は食事のときも帰るときにも私たちには顔をみせなかった。

この楽校を取り仕切っておられるおばさんは、やさしく、しかも丁寧にお付き合いしてくれた。が、正直に言っておなじ山村に住んでいる私にとってはここに泊まって格別に心が癒されたとか、自然のよさが身にしみるといったことはなかった。そして、ただ、それだけの人が来るのだらう、など、いわば経営的な面を掘りさぐる気持ちが強くなった。けれどまたそのおばさんにそれらを問うのはいささか酷の様に思えて聞きただすのを遠慮した。

朝食がすむとカミカツツリストの若い男が私たち夫婦を迎えに来てくれた。前日の夕刻「二人だけなので送ったチラシの通りの案内が出来ない、と言い、し

かも「それでも法に触れるようなことがない」など口走ったので、私は、それは私のせいではなくって君の会社の責任問題だろう」とやや大声をあげたためかカミカツツーリストという旅の会社の社長が「いろいろ」の事務所のある「月ガ谷温泉」宿に謝りに来る、などという一件があったりもしたためか彼の車の青年は示された時間までに来てくれて、細い坂道をあちこちと車を走らせて見せてくれた。

どの山里とも同じく坂道を上げれば上るにしたがって人影が薄くなる。さらに廃屋になった家々が淋しく目に刺さってみえる。山の道を歩いて下る二人の少年の姿が目にとまった。「スクールバスが来る広い道路まで歩いて行かなければならないんです」と車を運転してくれた青年は言った。道幅は軽自動車や一トン車ぐらいの小さなものであれば通れるが、スクールバスは上れないのだ。そんな道で一時車を止めてもらった。そして遠くにある棚田を眺めた。そこはかなりの高い標高である。そしてそこはすでに耕されていない。その姿が私の胸中を締め付けた。以前のように木材がいい値で売れたときには杉の植樹などをしたのだろうが、いまはそれも行なわれない。それどころか伐期に達している林でさえ間伐もされないままである。私は東日本復興も大切だが、この様子を永田町であれこれ言っている人たちははたしてみることがあるのだろうか、と、そんな怒りがこみ上げて来た。

その翌日は市場が休みということで一番見たかった葉っぱの集荷場をみせてもらうことが出来ないのが残念だった。また「いろどり」と農協との関係などもっと訊きたかったが何せ時間に制限があつて、そうしたいを充分に果たすことができないのが口惜しかったし、さらに「町行政」と「いろどり」や「カミカツツーリスト」との連繋をどのような形で協力し合っているのかもよく訊かずじまいだったのが残念だった。

しかし、このことをうまく仕切っているのは「地の人」ではなくて、いわゆる「ヨソモノ」である横石さんのようなのである。「ヨソモノ」はこの農村にもありがちな「ムラ意識」といったものにこだわらない。そしてそれには弱さもあるが反面強さがある、というのも私の体験的な見方だ。横石さんはまさにその強さを生かしている。

「上勝町はゴミの分別でも特殊な活動をしているところだ」と松山にいる娘が言っていた。そしてこの度のセミナーのプログラムにもその見字が入っていて案内してくれた。そこはけっして広い土地ではなく、こざっぱりと整理されていて以前自衛官として北海道にいたことがある、という人がいた。そのためか東北から出向いて行った私たちをたいへん親しみ深そうに快く案内し、説明してくれた。まだ若い女性だがなかなかの切れ者というのが私の印象。生ゴミの処理の仕方 は各家庭にそれを醗酵させる機具を町が助成金を出し

て用意させ、それで出来た醗酵堆肥は農地に返す、といった方式をとっているとのこと。その話を聞いたとき、私は長井市で菅野君たちが立ち上げたレインボープランのことを口にした。すると彼女は「それもよく知っている」との返事だった。思えばレインボープランのような大きな規模のものもいけれど、この町でやっている小さなものもやり易い。そしてこれがむしろ手軽にどこでもやれるものでは、と私は思った。彼女もそう言う。もちろんわが上市市でも生ゴミを腐らす器には助成金を出して用意させている。がその醗酵の仕方や、堆肥の使い方についてはもうひとつ行き届いていない。その足りなさを上勝のこのゴミ処理の担当者はよくこなしている。堆肥の作り方から利用の仕方までを徹底して指導しているのである。その様子を見聞したとき、このような立派な職員を採用し、育てている町長も立派なものだと見上げさせられた。そしてそんな思いをちよつと口にするると彼女はニヤニヤしながら「これらの事業を始めたのは前の町長です」と現在の町長に気をつかうことなく平然として言うのもまた頼もしい。

ゴミは収集車が町中を廻るのではなくて町民がみんなそれぞれに分別して持ち込むのだそうだ。つまり行政にだけ頼るのではなくていわば住民参加の町づくりなのである。わが町ではゴミの焼却場問題の解決がなかなか決まらず難しかったが、こうした山間の町であ

っても最初からそれを他人任せにしないで町民みんなで共にその方策を考え実行している町政をあずかる人たちのやり方には学ばされるものがある。

さらに持ち込まれて来た使い古した食器や衣類などもきれいに整理され、使えるものがあれば欲しい人はそれを無料で家に持って行き使用できるようにもなっていた。この時代まさか食器などの再利用といったことはないとしても美術品としての焼物の立派なものが出てくることもあるというし、書籍類もかなりあるので活用者がいるとのこと。

しかし老人だけの家庭もあるはずだからそうした車を持たない家では？ と問うと「近所の人が運んでくれる」とのこと。まさに山村ならではの共同体がここまで高齢化社会に追い込まれると改めて再生するものなのかとも思わされ考えさせられた。

セミナーは二日間だけなのだが、私は農家民宿にも興味があったのでそれを希望した。するとカミカツリリストでは快くそれを紹介してくれた。もちろんそれは一人二万九千円の費用のほかである。だがその家までの案内や、帰りの空港までは先の費用で送り届けてくれる。

お願いしていただいた農家民宿は勝浦町に近い「わか」と称する家だった。慈眼寺とか灌頂ヶ滝などの名所があつて夏期に訪れる人がかなりいるらしい。が私たちが訪れたときのその道は隣村へ行く車が一台、来

る車が二台か三台通っただけでまことに静観としていた。だがそれでもお世話になった民宿の庭先には野外喫茶の施設があったりもしているから季節によってはかなりの通行者がいるのだろう。

東北に比すれば南西地方の農家のつくりはいたって簡素だ。寒さや雪など自然の災いが少ないからだろう。東北地方では貧しい中でも家屋は大きく囲いががっちりしている。だから民宿などはどの家でもやろうとすれば容易にできるとの思いがする。だが来てくれる人がいるかどうかだ。いったい、その人の交流の大小の差が、四国の村とわが村との違いはどこにあるのだろう、とも考えさせられた。

「農家民宿」とはいうがご主人も以前は勤め人であったとのこと。そして奥方は現在も町内のどこかに勤めておられるとかで、食事の用意も、風呂の準備もご主人の仕事だ。

さて「わっか」という名称である。それには「輪になつて話し合いをする」といった意味があるらしい。つまり町の内外の人たちが寄り集まって、食べて飲んで交流するということである。そしてそれには過疎の町に人を呼び寄せるため、という意味が強くある。しかも過疎の問題には行政ばかりでなくて町の住民みんながこぞって取り組んでおられることの証であること、を私は興味深く感じ取った。

民宿「わっかかみかつ」は風呂場とトイレは全く現

代化されていてシャワーがあり、「水洗」できれいだ。都会の人を呼び寄せるためには「これだけはちゃんとしないと」との思いがする。我家もなけなしの財源をたいてそれを現代風にしたが、「わっか」の民宿もそのようになつていた。人を泊めるには保健所の指導で衛生面はやかましい。しかしそれらにかかる資金は少なくない。わが山形県でも一時期には農家民宿を盛んに奨め、それに対する助成の措置もあったが、それらの衛生施設が家庭用にも使われるようであつては出せない、とやかましい規制があつたためあまり進まなかつた。つまり行政がそうしたことにあまり真剣に取り組まなかつたのがその証だと私には見えて不満足なものがあつた。

「わっか」の風呂の燃料は薪である。そしてその窯の火（オキ）をいろりに移す。そのいろりの火で川魚を串に刺して焼いて食べさせてくれた。だが、季節が季節であつたことからか、その川魚は地元で釣つたものとは思えなかつた。もちろん野菜等は当家のご主人が栽培したもののようなだ。が、家の前の畑を見るとその栽培ぶりは根っからの百姓らしくはない。百姓の私にはそれがすぐわかる。しかし、それがまた考えようによつてはそうした素人らしさが都会の人たちにはかえって親しみを覚えさせるのかも知れない。そうした品々を使つて一生懸命調理をしているご主人をみてみるとあれこれ文句をつけたりすることはとても出来ない。が、

それでもやつぱりその料理の出来はプロのそれとは違

う。食事は膳も飯台も使わず、いろりの「アテガエ淵（炬ぶち）」（上勝では何と言うか分らないが狸森ではそう言う）に並べる。皿の数が沢山あつてそのアテガエ淵には並べきれない。盃を置くスペースすらもないほどのご馳走だ。そのいろりを囲んでご主人夫婦と、私たち夫婦の四人での談話が交わされた。どんな話をしたかはもう思い出せないが、蓮のようでもあり、里芋のようでもあつて、さらにはその交配種でもあるかのようなもの、その茎の部分をつし「ズーキ」といつておられたが、妻はそれを喜んで食べた。山形では「カラトリ」というのがあつて里芋の葉と似たようなものがある。だが、ズーキの芋は食用に使わず茎をおひたしにして酢醤油をかけて食べるのである。色は緑で、里芋のようでもあるがゆごくない。里芋の茎は生でおひたしや味噌汁などにして食べれば喉がチカチカしていからくつてダメ。が、表皮を剥きとつて乾燥すれば冬の寒い時の納豆汁には欠かすことの出来ない食材である。

蓮の葉は私が子どもの頃には盂蘭盆の時に仏前へのお供えをそれを裏返してお膳に敷いて使う習わしがあつた。が、もはや近年はそれをやる人はいないが上勝では大阪や京都、東京などの高級料亭や割烹などにそれを使うことをすすめ、売り込みに成功したという。もちろんその売り込みに力を尽くしたのも横石さん

だ。

しかし、「いろどり」が盛んに攻めの活動でやつておられた時からはずで十年以上経っている。したがつて当時七十代の人は八十歳になり、八十歳の人は九十歳を越えている。九十歳になつても元気で働いているおばあさんは「この人」だと写真を見せてくれたが、やつぱり私には年齢（とし）には勝てないことかを感じた。また、それに続く人を地元から求めることの難しさはさすが上勝といえども最大の課題であり難問であることを山村に住み、その内情をよく分かつている私には先が明るくは映らなかつた。

「村づくり」「街づくり」「地域づくり」といったことが流行のごとく言われている。貿易の活発化による高度な経済成長と合理化社会によつて失われた古き良き伝統を取り戻すことが必要だという。そしてその声を住民よりも行政がさらに高らかに言っている。全国にはその実践に励んでいる人も少なからずいる。しかしその声も空しく人口の都市集中が止まることなく農山漁村は過疎状態におちいつている。そうした渦中で九十歳でも元気で働いている姿をみるのもいいが、しかしそれはどこおかしくはないのか。病弱で働けない人からみれば九十歳でも元気というのはまことに羨まきわまりないだろうが若い人が住めない「ムラ」はやはり惨めだ。

もちろん上勝町に根を据えて、老人たちを元気に働

かせてくれて、さらにその人たちにパソコンの使い方を教えて、お金を稼ぐことに全身を粉にして知恵と力を尽くしてくれている「いろどり」の代表横石知二さんには頭が下がるし、文句のつけどころなどはない。私などにはとても真似の出来る技ではない。だからといって逃げるのではなく。

私は上勝に行つて、横石さんに二つのことを学んで帰った。そのひとつはムラ起こしの「核」は土地の人では出来ない、ということ。そして過疎の問題にあたっては若者のUターンは望まずIターンを促すことだと。そして現に株式会社「いろどり」の九人の働く人たちがみんながこの「地」の人ではなくてヨソ者であるということ。二つ目は、「お金」にならなければやる人はいない。そしてそれを抜きにして「地域づくり」というのはあり得ない、ということだ。

最後に案内してくれたのはオーナー制で耕作している棚田だった。町の中心からあまり遠く離れていないところだが大阪の人が来て田植えや稲刈りを体験して農業の大切さを自分自身で認識し、子どもたちにも教えるとともに楽しんでるのだという。その方法を細かく訊く時間がなかったが、その田圃でとれた米を一俵(六十キロ)を六万円で買い取ってもらう、といったシステムであることをカミカツーリストの青年が力を込めて教えてくれた。私を知る中ではそれは最高の値である。が、考えようによっては一人が一年で食べ

る米の量が六十キロだというからその代金を月に割れば五千円ではない。ちよつと飲み屋の暖簾をくぐれば軽く吹っ飛ばす金額だ。しかもこの金額は安く輸入されるそれと比べれば高いけれど、上勝の人たちや私のムラのような山村の人と地域の人たちを守ることに連なるものであると考えるならこれこそ有効な金の使い方がないのだぞと言える。しかもそれこそがこの国の人たちの自立を目指す根元であり促すものであるということ。私を私は都市住民に向かつて訴えたい。

言の葉倶楽部-II 第10号

2013.3.30発行

限定 130部



共同編集

岩井哲・大原瑩

発 行

言の葉倶楽部刊行会

表紙画／大竹順子

シリーズ作品

KI・MA・GU・RE



事務局

書肆犀(しよしさい)

上山市石堂 7-3-2

☎023(673)3040

E-mail

sai-tetu@sea.plala.or.jp